



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一次世界大戦期における日露接近の背景：文明論を中心として
Author(s)	パールィシェフ, エドワード
Citation	スラヴ研究, 52, 205-240
Issue Date	2005
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39076
Type	departmental bulletin paper
File Information	52-008.pdf



第一次世界大戦期における日露接近の背景

— 文明論を中心として —

バーリィシェフ・エドワード

序 論

第一次世界大戦期における日露関係というテーマは従来の研究で注目されなかったわけではない。この日露接近¹⁾に照明を当てる先行研究として、松本忠雄の『近世日本外交史研究』（博報堂出版部、1942年）、ピーター・バートンの『1916年の露日秘密同盟』（P. A. Berton, *The Secret Russo-Japanese Alliance of 1916*, Ph. D. dissertation, Columbia University, 1956）、S. S. グリゴルツェヴィッチの『1906-1917年における帝国主義的列強の極東政策』（Григорьевич С.С. Дальневосточная политика империалистических держав в 1906-1917 гг. Томск, 1965）、吉村道男の『日本とロシア — 日露戦後からロシア革命まで』（原書房、1968年）などが挙げられる。以上の研究において、第一回日露協約（1907）から第四回日露協約（1916）までに至る日露の政治的な接近の経路が徹底的に分析され、日露同盟協約に導く交渉プロセスが丹念に検討され、日露接近が同時代の列強間関係というマクロシステムのなかで位置付けられている。

同時代の日露関係がどうして「例外的に友好的」であったかという問題点に対して、吉村は『日本とロシア』のなかで次のような説明を与えている。「1907年から1916年までのおよそ10年間、日本の外交史上異例ともいえるべき — 日本の近代史で恐らく唯一の — 日露の提携が行われたのは、中国をめぐる両国の利害関係が一致したからであり、具体的には、満州、蒙古地域の勢力範囲確定が、共に戦後経営に悩む両者にとって必要不可欠であったからにほかならない」²⁾。これは先行研究の代表的なスタンスであると言っても過言ではあるまい。つまり、日露接近のメカニズムは、日露関係史よりも国際関係史という観点から分析され、その論理は古典的な国際関係論の立場から説明されているわけである。

こうした古典的な国際関係論は、権力均衡（balance of power）および国益（national interest）の概念を中心とする権力政治論（power politics）の形をとり、典型的な現実主義・唯物論で特徴付けられている。ここでは国際政治の全ての現象は権力均衡かつ国益の総計の上に成り立っているものとして取り扱われている。無論、著者も、国際政治の現象が取り扱われる際、その理論が明らかなメリットを示し、国家間関係の理解を深めることに役立っているという現実を認めているが、それと同時に物質主義的な素因を重視する理論には明らかな弱点もあるし、明らかな限界もあることを認めざるを得ない。権力政

1 著者は本論において「日露接近」という用語を使うとき、それを国際政治の現象としてのみでなく、ネーションというレベルでの過程として捉えている。

2 吉村道男『日本とロシア』増補、日本経済評論社、1991年、9-10頁。

治論という視点から行われた先行研究の結論は——当然のことであるが——権力均衡の変動あるいは国益の一致か不一致という領域を乗り越えることがない。ただし、国際関係論は決定論の形で現れることが少なくない。一定した権力均衡が成立したとき、双方の国益が一致すれば、国家が接近するであろうと推測されているわけである。それゆえに、歴史自身が多様性・選択性・偶然性を認めない、人間の自由意志というファクターを無視する予め決定された過程として登場している。先行研究にみられるアプローチは意思決定を迫られた政治家が社会と不可分な関係にあったことを軽視していると考えられる。これらの研究を読むと、研究者たちは人間が経済的政治的軍事的な現実だけでなく、心理的な現実 (psychological reality) の中に存在することを忘却しているように思われる。つまり、国際関係論という観点から行われた従来研究では社会との関連性が軽視されたため、日露接近は広い歴史的な文脈に編み込まれていなかったと言える。

本論においては、政治史と社会史の乖離を埋め、歴史に一体的な認識を与えるヴィジョンを求めて、学際的なアプローチをとっている。政治史と社会史との研究領域を結ぶ橋渡しとして、著者は「社会」(общество) という概念を取り入れる。今日の社会科学において、「社会」という用語は「政治」の反意語として捉えられることが少なくないが、本論に適用される「社会」は異なった意味合いをもっている。それは様々な多数の社会的なグループに分けられた、総体で国家を構成する国民 (people, народ) として把握されている。著者は、社会生活の統一的な形態である国家と、分裂している社会的諸団体とは、現実において不可分であり、「社会」という概念において一体化するという立場に立っている⁽³⁾。この概念は政治と社会との矛盾を止揚するものであるから、その適応は国家と国民を一体のシステムとして捉える可能性を与え、歴史の総体的な把握に資するであろうと思われる。

社会というシステムの不可分な属性として「社会意識」(общественное сознание) がある。これは社会思想と異なるものであるとまず指摘しておく必要がある。社会意識を論じる場合、著者は、個人的なことをすべて捨象して、社会の全体や一定した社会団体に独特な価値観や見解を見出そうとしている。社会はそれをなす構成員の「総和」でないのと同様に、社会意識も個人意識の「総和」ではなく、固有の生命をもつ質的に独特な精神体系なのである⁽⁴⁾。いわば、社会意識とは、社会というレベルと尺度における自己アイデンティフィケーションの産物であり、その影響は社会生活のあらゆる面に現れると考えられる。政治・文学・芸術などもすべてこうした社会意識の表現として捉えられる。

こういう「社会論」の視点からみれば、人間の生活が意識で左右されるのと同様に、歴史過程は社会意識で方向づけられる。この意味において、社会意識は直接に社会 (広義で捉えたもの) の行動、つまり政治に関連するものとして登場する。この関連性は社会意識の重要性を示唆している。無論、社会は様々な階層やグループからなっている複雑なシステムであるから、一体性をもつような「社会意識」は極めてつかみにくい現象であるが、社会意識の変容過程は分析の対象となりうると考えられる。何故かと言えば、歴史の流れおよびその道標はもはや明らかであるからである。日英同盟の締結、日露戦争、日露協商、

3 Брокгауз Ф.А. и др. Энциклопедический словарь. СПб., 1897. Т. 21^А. С. 633.

4 Большая Советская Энциклопедия (В 30 томах). Гл. ред. А.М. Прохоров. Изд. 3-е. М., 1976. Т. 24. С. 130; マルク・ブロック、讃井鉄男訳『歴史のための弁明：歴史家の仕事』岩波書店、1956年、124-127頁参照。

第一次世界大戦、ロシア革命、シベリア出兵などがそれである。過去を振り返って観察する歴史家の課題は空白を埋め、このような流れを意味付けることにあるとすれば、社会思想の検討は極めて重要なことである。それを分析することによって、主要な思潮を確定し、これらを歴史過程と照らしあわせることができる。それは歴史的現象における普遍的なものと個別的なものおよびその現象の発展段階と傾向を見出すことを可能とする。一方では社会思想の真髄であり、他方では政治の反射である社会意識の抽出は歴史過程の方向およびその内在的な意義を見出すことに役立つと考えられる⁽⁵⁾。

本論では、同時代の社会意識の一部として文明論といえるものに焦点を当てたい。ここでいう文明論は以下のような思想体系として捉えられる。この基盤には、人類という有機的な一体は存在しないという観念が置かれている。経済的・社会的な発展段階を中心とする進歩論と違って、文明論は歴史の中心的主人公として「文明」・「文明圏」および「文化」という名で現れる広大な文化組織を扱っているのである。それゆえ、世界史は様々な文明の相互関係の産物にすぎない。さらに、それぞれの文明には一定の「寿命」がある。つまり、それぞれの文明は、他の万物と同様に、出現、成長、隆盛、衰退、絶滅という発展段階を辿る。生物体のような存在である文明は、宗教の形で現れる独特な精神体系をもっている。こうした精神体系は遺伝のような文明の本質であるとみなされる。この視点からみれば、「文明」は独特な精神体系をもち自給自足的に存在できる、世界史的に一定の地位を占める文化的に異質な組織である。普遍性・自己完結性・完全性はこうした存在の特徴である。

文明論という思想的な体系は日露接近の社会的な背景の一つであったと考えられる。日露両国における文明論の広がり进行を明らかにし、その位置と社会的な意義を見極めることによって、日露接近のメカニズムの理解を深めれば、それを日露関係史や世界史というマクロシステムに編み込めるであろうと期待している。

1. 日露同盟の時代

今日の歴史学において、1905-1917年の日露関係が独特な「日露協商」の時代であったという認識がほぼ定着していると言える。先行研究において、第一次世界大戦期の日露接近に対して「日露同盟」という用語が頻繁に現れるにもかかわらず、日露同盟自体は注目されず、日露協商の一段階として取り扱われてきた。しかし、こうした視点は再検討を必要とすると思われる。

まず、同盟 (Alliance) と協商 (Entente) の差異を明確にする必要がある。現代の国際政治学において、同盟は普通軍事協定あるいは軍事協定から発生する関係として認識されている⁽⁶⁾。それは適切で正確な定義であろうが、現実において、同盟は軍事的協力の枠組みを超えることが少なくないと考えられる。日本の近代史に成立した同盟を振り返ってみると、「日英同盟」も「三国同盟」も「日米同盟」も、相当長期的な協調関係の方針を

5 著者の国際政治論や社会論に関しては拙稿「国際政治の力学：システム論の視点から」(『比較社会文化研究』九州大学大学院比較社会文化学府、第16号、2004年、147-158頁)を参照。

6 Glenn H. Snyder, *Alliance Politics* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1997), p. 4; ランドル L. シュウェラー「同盟の概念」船橋洋一編著『同盟の比較研究』日本評論社、2001年、253頁。

意味した。日本が結んだ同盟は、通常、長期的な戦略的パートナーシップとして現れた。安全保障の問題から発生する戦略的・長期的な協力は軍事的な面のみでなく、経済・貿易・国内政治・文化という幅広い分野に影響を及ぼしたのである。それに対して、協商は政治的な関係の枠組みを超えない概念である。元来、フランス語の“Entente”は友好的意向(“friendly understanding”)を意味する。相互に援助し合うという積極的義務を課する同盟に対して、協商は「従来の利害の衝突を解決一掃するといふ消極的の約束に過ぎない」⁽⁷⁾のである。協商は締盟国に軍事的・戦略的に助け合うことを義務付けないので、戦略的・長期的な関係の基盤にはならない。協商は戦術的・短期的な関係にすぎないと言っても過言ではない。言うまでもなく、同盟の締結によって生み出される関係は協商よりも高い依存性および高い安定性で特徴付けられる。さらに、世界史を辿ってみると、同盟の数は協商のそれよりも圧倒的に多いことが明らかになる。それは、協商は不安定な関係であるという意味において、一時的あるいは短期的な現象であり、歴史の転換期に要求される形態であることに起因していると考えられる。国際政治の流れに決定的な影響を及ぼすのは協商でなく、同盟である。20世紀初期の英仏露協商を検討しても、その原動力は露仏同盟にあったことが明らかである。同盟と協商との本質的な差異は、日露戦後の日露接近が、一体、協商であったか、それとも同盟であったかという問題の重要性を示している。こうした視点からみれば、同時代の日露接近は丹念な分析に値するものであると思われる。

概略的に1907-1917年の日露接近の歩みを再現しておこう。1907年7月30日に調印された第一回日露協約を協商国側での勢力の再分配として捉えても間違いではない。その協約を1907年6月10日に結ばれた日仏協商や、1907年8月31日の英露協商で特徴づけられる流れの一つとして把握すればよいと考えられる。1907年の日露協約の裏側にはイギリスが明らかに見える。イギリスからみれば、日露戦争でのロシアの敗戦はアジアでの有力な競争相手の排除を意味したが、ロシアの脅威が消滅した途端、ドイツの脅威が顕著化してきた。ドイツを抑えるために、イギリスにはロシアの協力が必要であったので、イギリスは積極的に日露関係の正常化を促進していた⁽⁸⁾。つまり、当時のヨーロッパでの国際情勢は英露対立から英独対立への転換で特徴付けられた。それゆえ、初発段階の日露接近は英露接近の副産物であったと言えないこともない。第一回日露協約は、日本外交の枢軸である日英同盟路線と併行し、補強しあう形となった。協約に付された秘密条文は南北満州の勢力範囲を規定し、日本は韓国に対する、またロシアは外蒙古における特殊利益を相互に尊重し、これに干渉しないことをとりきめた⁽⁹⁾。

1910年7月4日に締結されたいわゆる第二回日露協約は第一回協約を具体化し、より積極的な性格をもっていた。これは1909年の米国の満鉄中立化案への直接的な反発であったことがよく指摘されている。つまり、それは中国におけるアメリカの「門戸開放政策」に対抗する日露の反応であった。第二回日露協約の背景には、移民問題や人種問題の影響を受け、次第に緊張化しつつある日本と英米諸国との関係があった。このことは日本と英米諸国との関係に深刻な溝が生まれはじめたことを示しているが、この協約自体は軍事的

7 吉野作造「協商は可、同盟は不要」(『日露同盟可否論』)『中央公論』1915年10月1日、74頁。

8 Peter Berton, “A New Russo-Japanese Alliance?: Diplomacy in the Far East During World War I,” *Acta Slavica Iaponica* 11 (1993), p. 58.

9 吉村『日本とロシア』9、11頁。

な意義がなく、外交面の日露関係の正常化を志向するものであった⁽¹⁰⁾。

1912年7月8日に第三回日露協約が調印された。協約の内容は公開されなかったが、外国の新聞などはこの協約に注目した。評論家有賀長雄は「外報に現はれたる日露新協商」において、新協約を「明治式の外交より一転して大正式の外交に移る」吉兆として評価していた⁽¹¹⁾。この協約は、日露両国が協力しながら、東アジアにおける自国の特殊利益を保護すべきとの決意を表した。日露秘密協約締結の導火線となったのは、1911年の日英同盟の改訂であると考えられる。その改定によって、日米間に戦争が起こった場合、日本を支援するイギリスの義務が排除されたため、それは日本の政治家に重大な衝撃を与えた。移民問題と人種問題が熱烈な議論の的となった当時、英米関係の正常化は日本への脅威として受け止められた。つまり、英米の協調路線が明らかになり、日本の国際的立場が一層困難となったことが、日露接近と繋がったと考えられる。いわば、日露協調を新たな基盤にのせた第三回協約は日露同盟への道を開いたのである。

第一次世界大戦は日露接近を一層促進した。1915年2月21日、元老一致の意見として、日露同盟締結の緊要を陳述する建議書が大隈総理大臣に提出された。この建議書は陸軍の大御所山縣有朋（1838-1922）が作成し、大山巖（1842-1916）、松方正義（1835-1924）、井上馨（1835-1915）の事前の同意があった。元老たちは戦後の世界では黄白人種間の闘争が一層激烈になるであろうと考え、「白人連合の氣勢を未然に予防するの策」として日露同盟の締結を促進させようとしたのである。日英同盟のみによって、東亜の平和を長く保持することは難しいから、日英同盟の外に、日露同盟を締結する必要があるとも主張された。戦争中なら、英国も露国との同盟を歓迎するから、この最善の時機を掴まえ、露国との同盟を締結すべきであると言われた。更に、同盟の名に異議があるとすれば、現在の協商を拡張してもいいと説明された。ただし、新しい日露条約は「両国は其の一国か第三国より挑発せられたる場合攻防共に相援助する事」という項目を包容すべきであると、明確に述べられた。つまり、元老たちは、形式的に協商の形であっても、この日露条約が攻守同盟の性格をもつべきであるという立場にあったわけである⁽¹²⁾。

1915年、日露同盟の締結若しくは協商の拡張を目的とする外交交渉がスタートした。その結果、1916年7月3日にいわゆる第四回日露協約が締結された。公式に「協約」の名が付されたが、内容だけでなく、同時代での評価も、これは同盟であったことを証明している。新協約は開示部分と秘密部分からなっていた。秘密協約の第二条は次のように述べて、日露間における攻守同盟の成立を意味した。「第三国トノ間ニ宣戦アリタル場合ニハ締盟国ノ他ノ一方ハ請求ニ基キ其同盟国ニ援助ヲ与フヘク此ノ場合ニ於テ両締盟国ハ孰レモ予メ他ノ一方ノ同意アルニ非サレハ講和セサルコトヲ約ス」⁽¹³⁾。秘密協約の内容は1917年12月にソビエト・ロシア政府によって公開されるまで不明であったにもかかわらず⁽¹⁴⁾、これは同時代において日露攻守同盟として認識されていた。当時の新聞雑誌を検

10 吉村『日本とロシア』13-14頁。

11 有賀長雄「外報に現はれたる日露新協商」『外交時報』188号、1911年9月1日、8頁。

12 「日露同盟論」大山樺編『山縣有朋意見書』明治百年史叢書、1966年、345-348頁。更に、松本忠雄『近世日本外交史研究』博報堂出版部、1942年、169-177頁を参照していただきたい。

13 吉村『日本とロシア』303-304頁；E.B. Price, *Russo-Japanese Treaties of 1907-16* (Baltimore, 1935), p. 86.

14 鹿島守之助『第一次世界大戦参加及び協力問題』鹿島平和研究所、1971年、370-371頁。

討してみると、日露協約は日露間に「同盟にも等しい関係」、あるいは「同盟以上の関係」の誕生を導いたという評価が目立っている。「日露同盟論」という言葉がしばしば新聞雑誌の記事の題目として現れた⁽¹⁵⁾。芦田均はその回想録において、同時代の日露接近の性格について次のように指摘している。「日露同盟といふ言葉は、既に世間の記憶から消へ去っているかも知れない。事実またこれ程短命な同盟も歴史に数少ないことと思ふ。然しそれは現実存在した事実であり、これによって爵位を受けられた人も2-3に止まらなかった位である。この同盟条約は1916年7月3日にペトログラードで調印せられ、翌年11月に共産党政府が成立する時まで有効に存続したのである」⁽¹⁶⁾。

筆者の考えでは、「日露同盟」という名称の背景に極めて肝心なものが秘められている。つまり、日露同盟論および第四回日露協約の背景において、ロシアとの長期的で戦略的な関係を成立させようという日本の政治家が抱いていた期待、日露関係の全面的な正常化への動きが明らかに読み取れる。こうした抱負や志向性を存在させた源泉および背景が明らかにされなくてはならない⁽¹⁷⁾。

2. 文明論の源泉と内容 — ドイツ哲学の世界

社会科学において、「文明」(Civilization)ほど多様な意味をもつ用語は少ないといわれるが、「文明」を一定の高い段階まで発達した社会として捉えられることが多い。つまり、「文明」は精神的・物質的な面にも優れた文化遺産が作られている段階として認識されている。元来、「文明」という用語は「未開状態」の反意語として18世紀のフランスに生まれたとみなされる。こうした文明観の背景には18世紀の啓蒙主義に不可分な進歩主義の影響が感じられる。更に、進歩主義は西欧中心主義と密接な関連性にあつたと考えられる。進歩してきたヨーロッパは、自己を「文明」と称し、他の世界を「未開状態」として捉えていたわけである。その後、「文明」概念が抽象的なカテゴリーとなり、社会科学の分析道具として定着してきたにもかかわらず、ヨーロッパはあくまでも基準点として存在しつづけたのである。こうした文明観は、いわば、西欧中心主義・進歩主義に基づくリベラルな認識を示している。その特徴は「文明」が肯定的に捉えられるということにあると言える。つまり、そのヴィジョンによれば、人類は歴史的な発展につれて、「未開状態」から離れ、「文明」という高度に発達した社会形態に進化するのである。このとき、「文明」概念は、歴史的発展度を評価する、相対的にもかわらず普遍的な単位として捉えられている⁽¹⁸⁾。しかしながら、ドイツの社会学者シュペングラー (Oswald Spengler,

15 日露同盟論に関して、以下の文献を参照すれば、その広がりや概ね把握できる。「日露同盟論の価値」『太陽』第21巻第1号、1915年1月、107-120頁；「日露同盟に対する名士の意見」『日露実業新報』第1巻第1号、1915年2月、37-41頁；「日露同盟可否論」『中央公論』1915年10月1日、62-76頁；「日露同盟論」『中央公論』1916年4月1日、1-16頁；「日露新協約論」『洪水以後』第11号、1916年4月、6-9頁。

16 芦田均『革命前夜のロシア』文芸春秋新社、1950年、162頁。

17 同時代の日露接近の検討に入る前、日露関係のもう一つの特徴に注目する必要がある。日露関係史を振り返ると、その関係には明白な依存の不均等性といえるものがみられる。20世紀初期において、対露政策は日本外交の重要な課題の一つであったが、ロシアの対日政策はロシア外交で二義的にすぎなかったと言える。こうした観点からみれば、同時代の日露接近はまずは日本外交の問題として位置付けうると考えられる。

18 著者による「文明」の認識に関しては前掲の拙稿「国際政治の力学」152-153頁参照。

1880-1936) の思想に明確に現れているように、異なる文明認識も存在した。1918 年に出版された彼の『西洋の没落』(Der Untergang des Abendlandes) は文明論の誕生として位置付けられることが多い。

シュペングラーの理論はドイツ古典哲学の文脈で考察しなければ、その源泉および独自性を把握できないと思われる。まず、ドイツにおいて、「文明」(Zivilisation) という概念は伝統的に「文化」(Kultur) に対置するものとして認識されたことに注目する必要がある。「文化」は同質的な構造で特徴付けられる一方、「文明」は社会的・文化的・宗教的に多様な基盤の上に出来上がるものである。この意味において、有機性のある「文化」と異なり、「文明」は機械主義・技術主義・物質主義で特徴付けられる存在である。ドイツにおいて、「文化」は価値観・理想・社会像などに基づく独特な精神体系として捉えられる一方、「文明」は技術・設備などを中心とする物質的な現象として位置付けられた⁽¹⁹⁾。こうした考え方からすれば、「文明」は歴史的最高段階であるどころか、望ましくない歴史の終焉である。つまり、「未開状態」から「文明」への発展過程は進歩でなく、退廃である。「文明」という段階に達した社会は墮落の道を辿らざるを得ないわけである。

「文明」に対する否定的な認識はシュペングラーの『西洋の没落』に最も鮮明に現れている。彼にとって、文明とは、一つの文化の不可避的な運命であり、最も外的な、また最も人工的な状態である。「文明とは終結である。文明は成ることにつづく成ったものであり、生につづく死であり、発達につづく団結であり、ドリス様式とゴシック様式とが示す通りに、田舎と精神的子供につづく知的老年と自ら石造であるとともに石化させる世界都市とである」⁽²⁰⁾。言い換えれば、シュペングラーにとって、「文明」は文化の最高発展段階、すなわち衰退時代に当たるものであった。つまり、彼は「文明」を、花と同様に、咲いて落ちるべきものとして捉えていた。

シュペングラーの『西洋の没落』は、通常、文明論の出発点として位置付けられているが、文明論という思想的体系が第一次世界大戦直後に誕生したと考えるのは間違いであると思われる。シュペングラー自身も、その理論をドイツ哲学の流れから生まれたものとして認識していた⁽²¹⁾。数多い国に分離され、ヨーロッパの辺境地にあるプロシアは、文明論を支える思想が成熟するためにふさわしい「温室」であったのである。

文明論の芽生えはすでにヘーゲル (1770-1831) の歴史哲学に明白に現れている。ヘーゲルは世界史を「自由の意識を内実とする」精神の展開として捉え、世界史の主役として民族という有機的な一体を挙げた。彼によれば、宗教に最も著しく現れる民族精神の使命は「自分を知ることにある」。各民族精神は必ずその使命を達成するが、「この達成は同時にまたその精神の没落であり、他の精神、他の世界史的民族の出現、世界史の他の時期の出現なのである」⁽²²⁾。つまり、ヘーゲルの視点からすれば、世界史の主流をなしているのは、舞台における相次いで登場する民族の交代である。各民族は、最高の発達を目的とする一般人類運動において、それぞれその独自の遺産に基づいて世界的発展の一時期を代表し実

19 「文明」の概念の誕生とその受容について詳しくは Fernand Braudel, *A History of Civilizations*, translated by Richard Mayne (Penguin Books, 1993), pp. 3-5 参照。

20 シュペングラー、松村正俊訳『西洋の没落』改訳版、五月書房、第1巻、1977年、40頁。

21 シュペングラー『西洋の没落』3頁。

22 ヘーゲル、武市健人訳『歴史哲学』上巻、岩波書店、1954年、112頁。

現すべき使命をもって、歴史上のある一時代に必ず精神的運動の陣頭に立って、人類を指導しなければならぬということである。

独特な精神をもつ、生物のように生長している民族の概念にも明らかであるように、ヘーゲルの歴史哲学は明確な有機体論で特徴付けられた。それは18世紀末期から著しい進歩を示した自然科学の影響であった。自然科学者によって発見された法則は次第に社会を対象とする研究分野にも適用されるようになり、人文科学には次第に「生物主義」のシルエットが顕著化してきた。他方では、ヘーゲルの歴史哲学は、それぞれの民族が歴史の舞台から去る前に独自の使命を成し遂げるべきであるという使命主義（*миссионизм*）⁽²³⁾あるいは天職論といいうところを内蔵していた。

シュペングラーの文明論が有機体論と使命主義を吸収したという意味において、その源泉はヘーゲルの歴史哲学に秘められていると言える。更に、シュペングラーに大きな影響を与えたのは、ニーチェの哲学であった。シュペングラー自身が指摘したように、『西洋の没落』に浮かび上がる問題意識はニーチェの思想から受け継がれたものであった。そうすることによって、ニーチェの遠望はシュペングラーの「瞰望」となったのである⁽²⁴⁾。その意味において、文明論はデカダン思想と切り離せない存在である。デカダン論こそが洗練された文明論への道を切り開いたとみても差し支えがないと考えられる。言い換えれば、文明論は有機体論的な立場から西欧のデカダンスを説明し得る理論として現れた。いわば、シュペングラーはすでにヘーゲルの歴史哲学にみられる要素を発展させることによって、ニーチェの思想に鮮明に現れるデカダン思想をドイツ人なりに克服することができたわけである。『西洋の没落』はドイツの世界覇権という歴史的な目的の実現を可能とし、ドイツの未来性を肯定的かつ楽観的に根拠付けたのである⁽²⁵⁾。つまり、シュペングラーの文明論において、ヘーゲルに唱えられた考えはその完結を示したと言える。彼の文明論はドイツ哲学の延長線にあり、彼は典型的なドイツの愛国主義者、ドイツのナショナリスト、ドイツの帝国主義者であったと言わざるを得ない。骨抜きになった敗戦後のドイツにおいて、シュペングラーの力作はナショナルなプライドを復活させ、ドイツ人に世界大国の信念を与えた。国家社会主義の提唱者であるユンガー（Ernst Jünger, 1895-1998）が、1932年にシュペングラーに贈呈する『労働者』（*Der Arbeiter*）の表紙に「武装解除後、ドイツのために最初の新しい武器を鍛えて作ったオスワルド・シュペングラーへ」と書き加えたのはそのためであったに相違ない⁽²⁶⁾。

シュペングラーが『西洋の没落』執筆を1912年に始めたことも注目に値する。著作の表題はその時点で確定されたのである。世界大戦が勃発したとき、草稿はほぼ出来上がった

23 これをメシアニズム（*мессианизм*）と区別する必要がある。使命主義は、「使命」（*mission*）という語源から発生した概念であり、それぞれのネーションが人類史における独自の地位をもちうるという考えに基づいている一方、メシアニズムは「救済者」（*messiah*）という語源にさかのぼるものであり、神聖なる優位性をもつネーションが全人類を救済すべきであることを説いている。それに関しては以下の文献を参照していただきたい。Бердяев Н.А. А.С. Хомяков. М.: Путь, 1912. С. 209; Агеев К. Мессианизм и миссионизм // Кудряшов П. Идеиные горизонты мировой войны. М.: Труд, 1915. С. 115-118.

24 シュペングラー『西洋の没落』3、112頁参照。

25 Бердяев Н.А. Предсмертные мысли Фауста // Освальд Шпенглер и «Закат Европы». М., 1922. С. 68.

26 Патрушев А.И. Мифы и мифы Освальда Шпенглера (1880-1936) // Новая и новейшая история. 1996. № 3. С. 132-133, 136-138.

ていたが、世界情勢が変化したため、新しい修正と補足が必要となり、その作業が長引いたのである⁽²⁷⁾。第一次世界大戦前夜において、ドイツ社会にはすでに『西洋の没落』が目のものとして意識されはじめていたわけである。

当時のドイツで出版された文献を検討すれば、シュペングラーの「西洋の没落」という「診断」は極めて法則的なものであったことが分かる。文明論的な思想は作家メルヘルスの『我々の未来の過去 — 我々の先祖の衰退』(Gustav Adolf Melchers (1869-1944), “*Die Vergangenheit unserer Zukunft: Der Verfall unserer Vormenschen*,” 1908) や作家ロゼッゲルの『ゴルフストリーム』(Ludwig Rosegger (1880-1929), “*Der Golfstrom*,” 1913) などに鮮明に現れている。文明の形成自体は文化の衰退を伴う段階であるとの認識がこれらの著作の核心をなしている。彼らは全員一致して、工業化と都市化はドイツのネーションにとって最大の脅威であることを認めた。工業化は、労働者の肉体的・精神的な健康に悪影響を与え、ネーションの軍事能力を低め、工業化の結果とみなされる都市化は出生率の減少を伴っていると強調された。ドイツ国民は贅沢や不自然な生活のため、すなわち近代文明のため、精力を失い退廃するであろうとの脅威が認識されるようになり、工業化と都市化が導く物質主義は国民の活力を麻痺させるといわれるようになった。歴史自体は、芸術の隆盛などに特徴付けられる、最高発展段階に達したネーションが衰退の寸前であることを裏付けたかのようにであった⁽²⁸⁾。

シュペングラーによって持ち出された文明論を以上の文献に照らしてみると、彼の理論は単なる学説の一種であったのではなく、社会思想に深く根づいたものであったことが明らかとなる。つまり、シュペングラーには多数の先駆者があり、彼の文明論は例外的な存在ではなく、すでに準備された社会思想的な基盤の上で出来上がったのである。文明論と云う思想は文学のみでなく、国家学や地政学などという分野にも明らかに現れることは、それが単なる社会思想の枠組みを超えて、社会意識の不可分な要素となったことを意味する。1914年に勃発した世界戦争は引き金となり、この認識を刺激して解放しただけである。ドイツにおいて、世界大戦の悲劇はこうした文明論の視点から観察されていたのである。

世界大戦は、19世紀後半から20世紀初頭にわたってドイツに誕生して成長した文明論的な認識を覆すどころか、不思議に、その理論の多くを正当化し、文明論者に自信を与えたのである。世界大戦が始まると、ドイツのシュペングラーは「こういう思想が正しく今日に、しかもドイツで現れなければならなかったということ、しかも第一次大戦自体さえ新しい世界像の最後の相貌を規定することのできた前提の一部であったということ、これははっきりしたことであった」⁽²⁹⁾と指摘したが、日本やロシアの思想家たちの認識も同様なものであった。

27 シュペングラー『西洋の没落』4頁。

28 彼らの思想に関しては、*Фриче В. Германский милитаризм и его отношение к культуре // Вопросы мировой войны. Сборник статей под ред. проф. М.И. Туган-Барановского. Пг.: Право, 1915. С. 179-188* 参照すればよい。

29 シュペングラー『西洋の没落』4頁。

3. 「西欧文明の没落」とロシア

シュペングラーは彼の理論がドイツ哲学の産物であると主張したが、1918年に遂に出版された『西洋の没落』への反響はドイツよりもロシアの方が強かったであろう。『オスヴァルド・シュペングラーと「西洋の没落」』という論文集に執筆したベルジャーエフは、「シュペングラーの創作のような本は我々を強く興奮させる。そのような本は、ヨーロッパ人よりも我々の方が親しみを感じている。これは我々の文体（流儀）の本である」と指摘した。ロシアの知識人はこの傑作を「考えを興奮させる天才的と言っていいほど素晴らしい本」として歓迎し高評したが、「それは、シュペングラーが指している危機をずっと以前に感じていたロシア人を強く驚愕させる」ことができなかった。文明論という思想は19世紀後半のロシア社会にはすでに定着しており、ロシア人は「西欧文明の没落」を、ロシアが世界舞台に登場し、その使命を実現すべき瞬間として待ち続けていたのであった⁽³⁰⁾。

ロシアのために「ヨーロッパへの窓」の役割を長期的に果たしたドイツが、ロシア社会に様々な面において巨大な影響を及ぼしたことを改めて立証する必要はないであろう。地理的にロシアと隣国関係にあるドイツの社会思想がロシアに紹介され定着したことはなかなば自然なことであった。19世紀前半以降のロシア社会思想は、ドイツ哲学の圧倒的な影響下にあり、ヘーゲル、ショーペンハウエル、ニーチェなどがロシアの文化生活の不可分な要素となった⁽³¹⁾。

文明論という思想の芽生えもドイツから伝わってきたと考えられる。使命主義あるいは天職論と云うものを内蔵するヘーゲルの歴史哲学は1830-1840年代にロシアに広がり、ロシアの知識人を動かしした。この思想は、当時、ロシアにおける思想運動の中心となっていたモスクワ大学の学生サークルの中堅であったスタンケーヴィッチ（Станкевич Н.В., 1813-1840）たちに熱心に歓迎され、いわゆるロシア・ヘーゲリアンという流派の誕生に導いた。ロシアの未来を考えた彼らはヘーゲルの天職論に熱中し、それをロシアに当てはめた⁽³²⁾。「この思想が、露西亜人に、西欧の文明（中略）はもう墮落の域に近づいてゐる、之に代る可きは露西亜の文明である、露西亜の文明は、最も未来ある文明である、露西亜固有の生粋なる文明こそ、次の時代に於て世界を支配す可き文明であるといふ信念を与へた」⁽³³⁾。こうした思想はスラヴ派のイデオロギー的な基盤の一つとなり、アクサーコフ（Аксаков И.С., 1823-1886）、キレーエフ（Киреев А.А., 1833-1910）、チュッチェフ（Тютчев Ф.И., 1803-1873）、ホミャコフ（Хомяков А.С., 1804-1860）などの思想家によって更に発展させられたと考えられる。ヘーゲルは明らかにドストエフスキー（1821-1881）の作品にも影響を与えた。『作家の日記』において、ロシア人民は輝かしい未来性あるエネルギーに満ち溢れる「若い国民」（молодой народ）として形容されている⁽³⁴⁾。

30 Бердяев. Предсмертные мысли Фауста. С. 57, 67, 72.

31 Ковалевский М. Страница из истории нашего общения с западной философией // Вестник Европы. 1915. № 6. С. 158.

32 昇曙夢「露西亜文明を促進せる二大思潮」『新小説』1916年9月、46-47頁。

33 八杉貞利「露西亜国民性と其文明」『トルストイ研究』第3号、1916年11月、23頁。

34 Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в тридцати томах. Т. 22. Дневник писателя за 1876 год, январь — апрель. Л.: Наука, 1981. С. 72.

ロシアの思想における「文明」と「文化」の捉え方もドイツ人のそれと同様なものであった。つまり、ロシア社会において、「文明」は通常消極的に認識された。宗教的思想家たちは文化の衰退から文明の隆盛へという、近づきつつある転換契機を待ちながら神聖なる恐怖心を味わった。文明化は神を死なせるものとしてみられた⁽³⁵⁾。宗教心深いロシア人からみれば、文明は精神的な俗物主義・精神的なブルジョア主義に満ち溢れているものであったから、文明化というプロセスを避けるべきであると強調された。こうした宗教心こそは、西欧文明の没落というテーマ自体がシュペングラーのものでなく、むしろロシアの思想家たちによって持ち出されたものであったという場合の根拠なのであった⁽³⁶⁾。ヨーロッパ文明に対するロシア人の反応は悲劇に表現されるディオニューソス的な文化を思い焦がれるニーチェのそれと似通ったものであった。

ドストエフスキーは、キリスト教の真理を忘れ、合理主義と主知主義に陥った西欧文化はもはや死んでいるとみて、『カラマーゾフ兄弟』の主人公であるイワンに、ヨーロッパに対する次のような言葉を言わせた。「僕の行くところがただの墓場にすぎないということは、自分でもよく承知している。しかしその墓場は何よりも、何よりも一番貴い墓場なのだ。そこには貴い人たちが眠っている。その一人一人の上に立っている墓石は、過ぎし日の熱烈な生活を語り、自己の功名、自己の真理、自己の戦い、自己の科学などに対する燃ゆるの如き信仰を語っている。僕はきっといきなり地べたに倒れて、その墓石を接吻し、その上に涙を流すに相違ない」⁽³⁷⁾。この文章からも明らかであるように、ドストエフスキーはヨーロッパの「古い石」、「旧世界の奇跡」を愛した人であったが、その愛情は西欧文明ではなく、西欧文化に対するものであった。偉大な文化を拒否して無宗教的・無神論的な文明に突入したヨーロッパを、彼は厳しく罵倒した⁽³⁸⁾。

反近代主義はロシア思想の伝統的な特徴であった。自由主義、進歩主義、合理主義を神聖化する近代思想は、ロシアにおいて、熱烈な批判的になった。西欧文明に対するロシア人の態度は日露関係の正常化に大きな影響を与えた後藤新平（1857-1929）の「大戦後の文明」によく現れている。「元来露国人は西欧羅巴に対して一種の反抗心を有つてゐる、例へばドストエフスキーや、トルストイ等が聖彼得ス堡（サンクトペテルブルグ）の窓の西に向つて開かれてゐるのは寧ろ圧ふべき毒霧を吸ひ込むものであると叫び、西欧羅巴の文明、西欧羅巴の唯物的思想、西欧羅巴の功利的空氣に感染することを嫌忌し来れるは露西亜の国情を知るに際して見遁すべからざる事実である」⁽³⁹⁾。

ロシアにおける文明論の始祖として、スラヴ主義の提唱者とみなされるダニレフスキー（Данилевский Н. Я., 1822-1885）が位置付けられる。彼の『ロシアとヨーロッパ』（«Россия и Европа», 1869）には文明論の輪郭が明確に現れている。この著作において、ダニレフスキーはシュペングラーの形態学を40年間先取りし、いわゆる「文化歴史類型論」（теория культурно-исторических типов）を開発してきた。シュペングラーと同様に彼は、文化

35 Булгаков С.Н. Война и русское самосознание // Труды по социологии и теологии. Т. 2. Статьи и работы разных лет (1902-1942). М.: Наука, 1997. С. 146.

36 Бердяев. Предсмертные мысли Фауста. С. 65-67.

37 Достоевский. Полное собрание сочинений. Т. 14. Братья Карамазовы. Кн. I-X. 1976. С. 210.

38 Бердяев. Предсмертные мысли Фауста. С. 66.

39 後藤新平「大戦後の新文明」『新日本』1916年4月、25頁。

歴史類型という自己完結的な組織間関係が歴史の現実を形成するという考えから出発する。人類というものは歴史の現実ではなく、抽象的な概念であるので、世界史の主体としての人類の統一、様々な社会の政治的発展の普遍性、社会発展の前進性および連続性というようなものは存在しないと、彼は強調した。世界史は、平行線のように発展しつつあるいくつかの文化歴史類型の相互作用の産物にすぎない。従って、古代史・中世史・近代史という歴史の区分も、世界史あるいは人類史でなく、一つの文明に対してのみ適用できる⁽⁴⁰⁾。文明論の形を明確化させたダニレフスキーの力作は、スラヴ主義的な思想を体系化し、ロシア国民の自意識の発達における重要な転換契機となった⁽⁴¹⁾。『ロシアとヨーロッパ』は、ロシアにはヨーロッパと本質的に異なる歴史があることを示し、ロシアの独自の道の探求を刺激した。

更に、ロシアにおける文明論の開発者としてレオンティエフ (Леонтьев К.Н., 1831-1891) の名を挙げる必要がある。民主主義および自由主義の徹底的な反対者であり、それぞれの文化・ネーションの歴史発展の独自性の擁護者であったレオンティエフは、自分を「世界史における文化歴史類型の交代論」を根拠付けたダニレフスキーの弟子として位置付け、それに酷似する歴史発展論を開発した。「ビザンチン主義とスラヴ主義」(«Византизм и славянство», 1875) という論文で完成されたこの理論の粗筋は以下のものである。すべての社会 (общество) はその歴史において、1) 「原始的な単純素朴性期」(период первичной простоты)、2) 多様で調和的な創造や発達を伴う、最大の精神的・国家的な統一に表れる「繁栄する多様性期」(период цветущей сложности)、3) 多様性の解消や全均衡的な進歩に引き起こされる「第二次混合的単純化期」(период вторичного смешительного упрощения) との三つの普遍的な段階を辿る。医学教育を受けた彼の理論が生物学の法則および有機論に基づいたことは当然であった。文明史自体がこの理論の正当性を立証すると強調したレオンティエフは衰退しつつあるロマン・ゲルマン文明の代わりにスラヴ文明が登場するであろうと宣言したのである⁽⁴²⁾。

ダニレフスキーの理論の影響によって、1870 年代以来、ロシアの未来を楽観的に捉えようとする文明論的な考え方は次第にロシア社会のなかに広がり、「西欧の没落」は熱烈な討論的となり続けたが、第一次世界大戦前夜、黙示録的な気運が高まるとともに、ヨーロッパが最大の危機に直面しているという認識が再び表面化してきた。この予感 は 1914 年 2 月に完成されたベルジャーエフ (Бердяев Н.Н., 1874-1948) の『創造の意義』(«Смысл творчества») に明確に示された。彼によれば、欧州戦争は「西洋の没落」という意識を一層鋭敏にしただけである。『世界戦争の思想的地平線』(«Идейные горизонты мировой войны») の編集者クドリャショフは「西欧の文化的覇権のたそがれ」において、「当面の偉大な出来事 (世界大戦) は、ずっと前にスラヴ派の論者によって述べられたヨーロッパ文化の衰退や西欧の精神的な主導権の近い終焉という考えを刺激した」と指摘した⁽⁴³⁾。

40 Данилевский Н.Я. Россия и Европа: Взгляд на культурные и политические отношения славянского мира к германо-романскому. СПб., 1995. С. 68-72.

41 Бестужев-Рюмин К.Н. Теория культурно-исторических типов // Данилевский. Россия и Европа. С. 434.

42 Леонтьев К.Н. Восток, Россия и славянство: Философская и политическая публицистика. Духовная проза (1872-1891). М.: Республика, 1996. С. 81, 125-129.

43 Кудряшов. Идейные горизонты. С. 192.

第一次世界大戦は人類史における一定の境界線であるとみなされた。ロシアの宗教的思想家ブルガーコフ (Булгаков С.Н., 1871-1944) は、『戦争とロシアの自意識』(«Война и русское самосознание») (1915) において、世界戦争は以前にあったいづれの革命よりも、衝撃的なものであると述べた⁽⁴⁴⁾。世界大戦は旧世界の崩壊や「撲滅的時代」(ликвидационная эпоха) として迎えられた。世界大戦は世界体制の奥に隠れていた問題を表面に押し出し、世界が構造危機に直面していることが痛感されていた。当時、有名なロシアの社会学者デ・ロベルティ (Де Роберти Е.В., 1843-1915) は、世界戦争は、突然、20 世紀に入った人類が自負していた、繁栄する文明に隠されていた欠点や欠陥を暴き、顕在化させたと強調した⁽⁴⁵⁾。思想家ブルガーコフの意見では、世界戦争は新ヨーロッパ文明の破綻の一種であり、近代史の罪惡の摘発とその裁判であったのである⁽⁴⁶⁾。ベルジャーエフはその危機的な現象を次のように形容した。「今の戦争に先立っていたのは、深刻な精神的危機やすべての価値観の再評価であった。19 世紀から受け継がれた世界観のすべての基盤は揺れはじめた。世界戦争は、深層や下層土に流れるものを表面、歴史の舞台に押し出すはずである。(中略) 世界史的な破局は、国際資本主義と国際社会主義、帝国主義と軍国主義などの全旧文化の危機、旧生活のすべての基礎の危機となろう」⁽⁴⁷⁾。世界戦争の源泉は国際政治の構造自体、西欧文明自体に潜んでいることは明らかであった。

世界戦争は、不可欠な精神的な土性骨のない、物質的で俗物的・プチブル的な文明 (мещанская цивилизация) の崩壊として受け止められた。新スラヴ派と呼ばれた思想家ブルガーコフは、「ひどい騒音に伴って、俗物的な文化のバベルの塔が崩壊しつつある。(中略) その最期がやってきた。(中略) ヨーロッパ文明は、まず、その物質的な基礎において、自然発火までにいたったのである」と、西欧文明の終焉を告げた⁽⁴⁸⁾。その状況下において、世界大戦は現実主義、すなわち科学文明・物質文明の生み出した弊害として認識されたのである。思想家ゲルシェンズォン (Гершензон М.О., 1869-1925) は進歩的な階層までに及んだドイツ社会の激昂およびドイツ軍の残忍な行為は、科学的な進歩自体も物質的な文化の発展自体も、人間を精神的に浄化し、道徳的により高尚にすることができないことを証言すると指摘した⁽⁴⁹⁾。

1915 年 6 月、ベルジャーエフは「ヨーロッパの終焉」(«Конец Европы») を執筆する。この趣旨は、限られた地域でしかないにもかかわらず宇宙になろうとする、文化の独占者としてのヨーロッパの時代はその結末に近づいたという点にあった。しかし、こういう世界史の転換期、すなわちヨーロッパの日没は世界の暁とつながるであろうと思われた。「ヨーロッパのたそがれ」の前兆である世界戦争は東洋や西洋を問わず、すべての人種や地域を世界的循環に巻き込むであろうと強調された。つまり、「西欧のたそがれ」は東洋やアメリカを「夜明け」に導くであろうと予想された。その結果、ヨーロッパは世界史の

44 Булгаков. Война и русское самосознание. С. 152.

45 Кудряшов. Идеиные горизонты. С. 45.

46 Булгаков. Война и русское самосознание. С. 163.

47 Кудряшов. Идеиные горизонты. С. 199.

48 Носков В.В. «Война, в которую мы верим»: Начало первой мировой войны в восприятии духовной элиты России // Россия и первая мировая война (Материалы международного научного colloquium). СПб., 1999. С. 328.

49 Кудряшов. Идеиные горизонты. С. 36.

中心地、最高文化の保持者の地位を失うであろうと、ベルジャーエフは強調した⁽⁵⁰⁾。

ベルジャーエフによれば、「ヨーロッパの終焉」の源泉は物質主義的な帝国主義にあった。最も平和な帝国主義さえ戦争の種を内蔵すると、彼は主張した。20世紀初頭には、ローマ帝国の形で現れた「神聖なる帝国主義」の代わりに国民国家(nation-state)を中心とする「ブルジョア的帝国主義」が登場したということで特徴付けられていた。こういう新帝国主義は、古来の理想の変質であり、「国民国家の物質的な世界覇権への欲求」であるとみなされ、容赦なく批判された。「20世紀の帝国主義は国際政治における大国主義的な地位のための闘争である。帝国主義はもはや全世界的・超民族的な統一および聖なる普遍主義への欲求ではありえず、それぞれの民族(ネーション)が大陸や海洋において、大強国になりたいという欲求だけである。これは、政治的・経済的覇権、市場、海洋貿易などのための闘争、即ち社会ダーウィニズムである。ローマ帝国(imperium Romanum)から歪曲された名しか残っていない。ブルジョア的帝国主義は普遍的な覇権をめざす国民国家の割拠主義(партикуляризм)の身勝手な野望である。こうした目的は横領と奴隷化を通じて達成されている」⁽⁵¹⁾。こうした帝国主義の批判は同時に工業化・近代化・都市化の批判でもあったことは言うまでもない。

ロシアでは、ドイツの戦争責任が熱烈に議論されたにもかかわらず、評論家・学者の多くは世界大戦の勃発をドイツの好戦者の陰謀のみで説明できないという点では一致していたのである。ドイツは近代欧州文明の欠陥が最も著しく現れた国にすぎないと考えられた。つまり、問題の源泉はドイツにではなく、西欧文明の根底にあると黙認されたのである。西欧が生み出した近代主義・進歩主義自体が問われていた。ブルガーコフによれば、世界戦争はイギリスとドイツの間に激化した不道德的な自由競争の結果でしかなかった⁽⁵²⁾。ベルジャーエフは、地理的にも人種的にもイギリス人は最も——もしくは唯一の——帝国主義的な国民であると指摘し、イギリスの責任を問う。

ロシア社会にとって全世界的な性格をもった第一次世界大戦は、ロシアの思想的エリートの実証的な探求に大きな刺激を与えた。ロシアの使命および世界戦争におけるロシアの課題に関する諸問題は、1914年から1918年までの時期に、哲学的な議論の一大テーマとなった。世界戦争によって表面化した西洋文明の危機はロシアに独自の使命を果たす貴重な機会を与えていると信じられた。ロシア社会は愛国心で沸いていた。戦争が勃発すると、ロシア社会は階級・民族・政党などを問わず、団結してドイツとの戦争をやり遂げる覚悟をした。社会の一致は、一時的に国内政治的な対立を緩和させ、相互和解の雰囲気を作った。当時のロシア文献において、ドイツとの戦争は「祖国戦争」(Отечественная война)や「大戦争」(Великая война)として位置付けられた。ロシアにとって、ドイツとの戦争は原則的な性格をもって、「西洋文明から解放しよう」というスローガンの下で闘われた。ベルジャーエフは1915年に出版した『ロシアの心』(«Душа России»)において、こうした感情を次のように表現した。「この戦争は、ロシア人をドイツに対する奴隷的・従属的

50 Бердяев. Предсмертные мысли Фауста. С. 56; Он же. Конец Европы // Судьба России: Опыты по психологии войны и национальности. М.: Г.А. Леман и С.И. Сахаров, 1918 参照。

51 Кудряшов. Идеинные горизонты. С. 133-134.

52 Булгаков. Война и русское самосознание. С. 150, 154, 163-166.

な態度、または西欧に対する不健全でヒステリックな態度から解放すべきである」⁽⁵³⁾。ブルガーコフは、世界戦争は「西欧の偶像崇拜からのロシア精神の解放、偶像の破滅、新しい偉大な自由という、ロシアの自意識史における新しい偉大な時代」が訪れたことを意味すると指摘した⁽⁵⁴⁾。

世界大戦期、ロシアの独自性を説くメシア主義的な声が強まってきた。世界戦争に対するロシア思想家たちの態度は黙示録的なものであったが、同時に楽観的なものであった。ベルジャーエフが指摘したように、「切迫せる破局を望見するこの黙示録的気分は、ロシア人のもとでは、つねに大きな希望と結びついていた」。それはメシア待望の根源であり、独自のロシア的千禧年説であった⁽⁵⁵⁾。ベルジャーエフは、来る時代において、ロシアはラテン文明やゲルマン文明と同様に、世界を変えるべきであると主張し、ロシアにおいて、世界の精神的生活の中心がロシアに移る時代が訪れるという予感が漂っていると指摘した。自然的に広大な空間の所有者となったロシアは帝国主義的な野望というものをもっていないから、帝国主義の克服という課題の解決に当たって、極めて重大な貢献をもたらすと信じられたのである⁽⁵⁶⁾。ロシアの哲学者エヴゲーニイ・トルベツコイ（Трубецкой Е.Н., 1863-1920）は1915年に完結された『戦争とロシアの世界的課題』（«Война и мировая задача России»）において、それぞれは「ドイツは何より偉大である」（Deutschland, Deutschland über alles）というスローガンを指針として、皆が互にむさぼり食っているなか、ロシアの課題はこうしたスローガンに特徴付けられる現実を克服する上で、様々な民族を結束させることにあると主張した⁽⁵⁷⁾。

ブルガーコフは、ロシア精神の偉力、その精神の宗教的な深刻さを世界に証明すべき時がきたと主張し、ロシアの未来だけでなく、世界の未来もロシアにかかっていると強調した⁽⁵⁸⁾。当時の有名な評論家タールドフ（Тардов В.Г., 1879-1918?）は、世界戦争を世界史の大転機として見なし、戦後、世界史の舞台に創造的な勢力としてスラヴ人が登場するであろうという期待感を表していた⁽⁵⁹⁾。ロシアは「若い国民」であるから、輝かしい未来をもっているという考えが再び登場してきたのである⁽⁶⁰⁾。

それと同時に、西欧への従属から解放されなくてはならないという声が強まった。西欧文明自体が、ロシアにとって、最早不必要な存在になったとまで述べられた。西欧文明が世界に紹介した技術、機械などを導入しなくてもいい、ロシア人らしい生活を送ればいいという考えが唱えられた。西欧文明を無批判に受容したため、ロシアが独自の道から逸れたという、いわゆる新スラヴ主義者の批判が広く聞こえるようになった。「西欧において、自然を征服しようとしているが、我々は自然との創造的・平和的な協力を求めなければならない。我々は西欧の積極性と東洋の平和愛好性を自分の中で融合させなければなら

53 Носков. «Война, в которую мы верим». С. 334.

54 Булгаков. Война и русское самосознание. С. 162.

55 Бердяев Н.А. Самопознание (Опыт философской автобиографии). М., 1991. С. 165.

56 Носков. «Война, в которую мы верим». С. 329.

57 Кудряшов. Идейные горизонты. С. 122.

58 Булгаков. Война и русское самосознание. С. 169-170.

59 Кудряшов. Идейные горизонты. С. 130.

60 Булгаков. Война и русское самосознание. С. 156, 168.

ない。こうした融合の成果となるべきは我々の未来の文化である」⁶¹⁾。長期的に西欧文明の虜であったロシアにとって、解放されるべき時期が訪れたと思われ、東洋と西洋との間で仲介者の役割を果たすロシアは、戦後、人類統合への道を示さなければならないと論じられた。これはロシアの使命であると信じられたのである。ロシアにとって、遂に、衰えつつある西洋から世界の主導権を引き継がなければならない時代が近づいたという認識が台頭してきた。

第一次世界大戦によって刺激されたナショナリズムの時代において、ロシア人はキリスト教などの伝統的な価値観を振り返って、西欧文明の産物としてみなされていた帝国主義およびナショナリズムの悪循環からの出口を見つけようとした。ロシア人からみれば、西欧文明の権化であったドイツとの戦争はいわば解放戦争であり、西欧文明に対する反発でさえあった。「西欧に利用される」という従属感、ロシアの反西欧主義の基盤ともなったと考えられる。ロシアにおいて世界大戦はスラヴ主義者が唱えた「ヨーロッパの衰退」という観点から受容されたことは、文明論といえる思想が社会思想の有機的な部分となったことを明瞭に示している。「ヨーロッパの衰退」はロシアにその世界的な使命を成し遂げるチャンスを与え、ロシア文明の独自性を際立たせたのである。

4. 「西欧文明の没落」と日本

世界大戦期、日本においても文明論の輪郭がくっきりと浮かび上がった。文明論的な認識が明確に現れた人物として、遠藤吉三郎 (1874-1921)、昇曙夢 (1878-1958)、徳富蘇峰 (1863-1957)、鹿子木貞信 (1884-1949)、茅原崋山 (1870-1952)、後藤新平 (1857-1929)らが挙げられる。彼らの思想は同時代の社会意識の大きな流れを代表していると考えられる。

ロシアと同様に日本においても、世界戦争は時代的な出来事として受け止められた。当時の評論家が指摘したように、1914年6月28日、ボスニア州のサラエヴォにおけるセルビア刺客の弾丸が、オーストリア国皇太子フェルディナンド太公を倒した瞬間、旧世界と新世界とが截然と区別されてしまったのである⁶²⁾。ヨーロッパが苦しみ陣痛から新しい世界秩序が生まれるであろうと思われた。同時代人は目の前で行われている歴史的な時代の交替を痛感し、歴史を一転する新紀元が目前に迫っているという気がした。

世界戦争は西欧文明の孕んでいる欠陥を鮮明に暴いた。大正期の著名な評論家徳富蘇峰は『世界の変局』でそれについて次のように論じた。「今回の戦争は、吾人に誨ふるに、欧州文明の弱点と欠陥とを以てしたり。偽善なる欧州文明、粉飾せる欧州文明、精光赫灼として、日本国民の眼孔を眩惑せしめたる欧州文明か、赤裸々の本体を暴露し来りて、其の真相を示したるは、吾人に取りて最も痛快なる教訓と云はざる可らず」⁶³⁾。日本においても、世界戦争は西欧文明の原則に基づく世界体制の副産物であるという認識が深まった。西洋文明は既に終末に近づいており、新しい時代が来るべきであるという予感 は広く普及した。

61 Кудряшов. Идеиные горизонты. С. 145-146.

62 「欧米再視察の途に上らんとする茅原崋山氏を送るの辞」『日本評論』第16号、1916年8月1日、99頁。

63 徳富猪一郎『世界の変局』民友社、1915年、480頁。

危機に直面している西欧文明の主要な本質は近代主義にあるとみなされ、近代社会の欠陥が注目されるテーマの一つとなった。近代化は汚職・人格の機械化物質化・精神の空洞化などの様々な副産物の出現を伴っているという認識が広まった。工業発展は物質的な面での進歩だけを意味し、人間を機械の奴隷とするのではないかと近代化のメリットが疑われはじめた。近代化は人間が作り出した物質力によって支配されてしまうであろうと、懐疑的な論調が強まったのである⁽⁶⁴⁾。物質的な発展は人間対環境や人間対人間の関係の調和を破壊するという被害の方が目立つようになった。産業の発展は貧富の差を拡大し、社会関係を悪化し、その不調和を高めることは明らかであった。近代化が生み出した「商業主義、個人主義、軍国主義、生活上の物質主義、宗教道徳の懐疑主義」などは国家の基盤自体を揺るがしているとみなされていた。「近代」という言葉自体が極めて否定的に捉えられはじめたのである⁽⁶⁵⁾。

西欧文明の行き詰まりの最も重要な原因として、それが19世紀以降、現実主義的・物質主義的な思想に偏してしまったことが挙げられた。ドイツはこの「罪惡」に陥った国であるとみなされ、ドイツの戦争責任の問題は熱烈に議論されたが、ドイツの失敗はドイツ文明自体の欠陥でなく、近代化を促進させた英仏側から侵入した「現実主義の文明即ち科学主義物質主義の文明の失敗である」と考えられた⁽⁶⁶⁾。つまり、ドイツの罪惡は現実主義や物質主義を過大視したことにあると考えられたわけである。評論家北嶋湖が、「ドイツ人が方法の産物たる産業主義の物的力に眩惑せられて、自己の作り出した物質力に支配されてゐること」を認めながらも、「今回の戦争が独逸思想の墮落に全部の理由があると評するのは余りに酷評である」と主張したのは、こうした産業主義が人間を機械化し部分化する弊害は、何れの国も免れるものではあるまいと考えられたからである⁽⁶⁷⁾。

近代主義の批判は近代主義の権化である英米諸国の批判となった。イギリスの戦争責任も問われた。「英国は、20世紀の新傾向を看破して、深く嫉妬恐怖の念を胸底に蔵め、悪辣な手段を以って列国を操縦し、対独外交の暗闘数年に渉り、遂に今回の大乱を拓いたと云ふことが実に時局の真相ではないか」⁽⁶⁸⁾。世界戦争は、まず、イギリスの文明やイギリスの政治が様々な欠陥に満ち溢れていることを示していた。イギリスの態度に対し「痛切に不満を抱く」参謀本部編修官の長瀬鳳輔（1865-1926）は、イギリスの参戦が「英国権威の失墜」を意味しているものであると主張した⁽⁶⁹⁾。当時、思想生活の主流の一つをなす『第三帝国』、『洪水以後』および『日本評論』の創刊者である評論家茅原華山は、イギリスの危機を「世界大帝国の没落」として受け止めた。ただし、その没落は「為すべきことを為した」帝国の自然死として位置付けられたのである⁽⁷⁰⁾。後藤からみれば、1914年に開始した世界大戦は「虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協」を破壊する

64 北嶋湖「独逸思想と今次の戦争」『日本評論』第21号、1917年1月1日、54-55頁。

65 稲毛詛風「戦後の文明と我が国の使命」『日本評論』第17号、1916年9月1日、7-9頁；「突撃的精神」『日本評論』第22号、1917年2月1日、1頁；若宮卯之助「大亜細亜主義とは何ぞや」『中央公論』1917年、4月号、6頁。

66 稲毛「戦後の文明と我が国の使命」13頁。

67 北嶋「独逸思想と今次の戦争」54-55頁。

68 片桐西次郎「20世紀は大陸経営の時代：欧州大乱の根本原因」『日本評論』第21号、1917年1月1日、64頁。

69 長瀬鳳輔「人道の危機」『第三帝国』1914年8月16日、5頁。

70 茅原華山「新文明の大誕生」『第三帝国』第45号、1915年7月5日、4頁。

ために爆発したものであった。世界戦争は「已に生命を失ふべき十九世紀の老朽文明に最後の止めを刺し、將に開けんとする二十世紀の新鮮なる文明の大誕生を助けんとするもの」として捉えられた⁽⁷¹⁾。その歴史的な意義は、全人類の支配者・統治者の仮面を装っている「英国民」が既に老熟し、完成された民族であるという点に発見された。後藤の言葉を借りれば、「英国は今や世界的膨張の極限に達し、其の国民の数と富とに於て、將た又其の政權上の威力と内面的発達とに於て、略々文化的に世界統治の大業を完成したるやに看做されて居る。但夫れ事物の完成は常に爛熟を意味するが如く、英国は今や已に正午を過ぎて、日没に向ひつつあるかの感なきを得ない」⁽⁷²⁾。つまり、「世界大帝国の没落」は長い歴史的な時代の終焉として認識された。イギリスが直面した危機は一国の問題ではなく、全体の世界体制の問題であった。その没落は大英帝国を中心とする世界秩序の崩壊を意味した。

他方において、世界戦争はイギリスの自由主義ではなく、ドイツの軍事主義の効率を立証しているのではないかとの声も強まってきた。欧州戦争はイギリスの政治体制が戦争課題の遂行に向いていないことを示したからである。世界大戦が国内の資源の動員を必要としていたが、国家の役割を余り評価しない自由主義的な政治体制はその課題を効率的に解決できないことが明らかとなった。総力戦の論理は自由主義が生み出す個人主義ではなく、団体主義を必要としていた。自由主義体制の原動力とみられる「利己主義的な」ブルジョア階層は総動員を妨げる要素として考えられた。夏目漱石（1867-1916）は、戦争中のイギリスが強制徴兵制を導入したことを、「既に独逸が真向に振り翳してゐる軍国主義の勝利と見るより外に仕方がない」と認め、「戦争がまだ片付かないうちに、英国は精神的にもう独逸に負けたと評しても好い位のものである」と指摘した⁽⁷³⁾。徳富蘇峰も「欧州の戦乱は、実際に於て、軍国主義の成功と勝利とを、現示しつつあり」とした⁽⁷⁴⁾。代議政治、政党政治、責任内閣制度もまもなく破産するのではないかと考えられはじめた。「保守主義、非適応主義を標榜する彼等も必要の前にはアダム・スミス以来の国是たる自由貿易主義を倉皇として保護干渉主義に改めざるを得なくなつた。これその Laissez-faire 主義の破産ではなくて何だ」と、アダム・スミスの提唱した原理自体が問われるようになった⁽⁷⁵⁾。

西欧の危機は「弱肉強食」を中心とする自由主義の危機であるとみなされた。西欧は素晴らしい技術の発展を示したが、その「驚異すべき発明」は「大馬鹿骨頂の大戦争の犠牲」に捧げているだけであると、西欧の好戦主義が攻撃された。西洋文明の精神は貪欲であり、その手段は略奪であると指摘され、国際政治における「国民的暴利主義」はその法則的な結果であると強調された⁽⁷⁶⁾。

世界戦争は、明治維新以降、日本が模範とした西欧文明の危機でもあった。それは「文明」という観念の再解釈とつながった。第一次世界大戦の状況下において、「文明」という言葉自体が「停滞」「頹廢」「衰退」という意味で使われはじめた。文明が享樂主義、個

71 後藤新平『日本膨張論』通俗大学会、1916年、7-8頁；後藤新平「大戦後の新文明」、29頁。

72 後藤新平『日本膨張論』198-199頁。

73 「点頭録 軍国主義」『漱石全集』第9巻、漱石全集刊行会、1918年、1043頁。

74 『独逸軍国主義』民友社、1916年、序文、1頁。

75 「戦闘曲」『日本評論』第16号、1916年8月1日、94頁。

76 若宮「大亜細亜主義とは何ぞや」3-4、6-7頁。

人主義、無信仰などの弊害をもたらすという認識が広がった。同時代人の目には、西欧文明は崩壊前夜のローマ帝国のように映っていた。ローマ帝国のように、拝金主義・享楽主義・物質主義を偶像とする西欧はすでに墮落してしまったといわれた。日本がすでに墮落してしまった西欧文明を模範とすることは「亡国の手段」であると、遠藤は強調した。「維新元勳連の惚れた西洋は、17～18の娘盛りで、綺麗でもあったし愛嬌もあったのだ、今日ではそれが梅干婆となって、而かも白粉コテ塗り黒髪附の妖婆である」⁽⁷⁷⁾。

遠藤と同様に衰退しつつある文明の特徴として享楽主義を批判したのは、後年「八紘一宇」政策の代弁者となった鹿子木であった。「私共の遭遇する思想は、実に享楽主義的思想であります——常に老衰頹廢せんとする生命を裏付ける享楽主義的精神であります。而して現代の享楽主義的精神は、独り之れを標榜して立つ世の所謂享楽主義者にのみ止まりませぬ。現代の政治、教育、宗教はその根底に於て実に如之享楽主義的動機の上に動きつつあるのであります。現代政治家の自由主義的傾向、現代宗教家の平和主義等、殆んど皆之の卑しくも醜き心の泥濘より生れたる蓮に外ならぬものであります」。鹿子木によれば、日本文明の退廢の原因は、明治維新の日本は物質的文明、すなわち「文明の外殻、皮相」にすぎないアメリカ・ヨーロッパ文明を摂取したということにあった。更に、この弊害は日本が「西洋諸国の中、最も貧弱浅薄なる文明の内容を有せるアメリカ」と最も親近したことによって益々強められたと、彼は論じた⁽⁷⁸⁾。

「西洋の没落」の時代において、「拝英主義」が批判されはじめ、「欧州より解放せよ」と提唱されるまでにいたったのである。日本人があまりにイギリス思想に囚われ、あまりにヨーロッパの思想のみを絶対至上視していると強調する評論家も現れてきた。「英米の唯物主義」、「福沢翁の功利哲学」、「人生を金銭に換算せる物質主義」などは悪酒のように日本社会の青年の想像力や行動力を麻痺し、糜爛（びらん）するのではないかと危惧された⁽⁷⁹⁾。後藤によれば、日本人は西洋を先生として崇拝しつづけた「小学生の時代」がもはや終わっているのも、その「自己本来の立場に立ち戻らなければならぬ時が来た」⁽⁸⁰⁾。

日本の独自の近代思想の形成は、西欧文明から取り入れた要素の反省と独自の基盤の探求を促したと考えられる。森鷗外（1861-1922）はそれぞれの文明が歴史的基礎の上に立脚していると強調し、「西洋の出来上がった理想を日本へそのまま持つてきてもその実現は不可能事に属する」と述べていた⁽⁸¹⁾。維新以来導入されたすべての思潮が「翻訳的、輸入的、機械的、形式的、物質的、表面的」な性質をもっているという感覚が強まってきた。外国の思潮が「無理解、無自覚、無反省のままに多くの学者論者に受け入れられていることを最大の遺憾とする」と言われはじめた⁽⁸²⁾。日本は模範的な発展から独自の発展へ転換しなければならないと痛感された⁽⁸³⁾。ヨーロッパから取り入れた政治制度が日本には適当ではないという疑念が強まってきた。輸入された概念に基づく政治は民族特殊の

77 遠藤吉三郎『欧州文明の没落』富山房、1914年、74、41-48、59、95、113頁。

78 鹿子木貞信『文明と哲学的精神』東京慶応義塾出版局、1915年、4-5、7-8頁。

79 小倉徂峰「茅原華山氏最近の政治思想」『日本評論』第21号、1917年1月1日、161、163-164頁；金子筑水「緑陰雜感」『日本評論』第16号、1916年8月1日、25-27頁。

80 後藤新平『日本膨張論』174-177頁。

81 平川祐弘『西欧の衝撃と日本』講談社学術文庫、1985年、210頁。

82 恵美東臺「民族心理と政治文明の趨勢」『日本評論』第21号、1917年1月1日、33頁。

83 金子筑水「緑陰雜感」20-21頁。

歴史や素質を忘却するものであると指摘され、文明的な特徴を無視し普遍的な原則の上に国家を建築するのは、「体質病性の如何を問はずして肉食を強制すると異なる」と述べられた⁽⁸⁴⁾。特に、日本がイギリス流の代議政治や政党政治に陶醉し憧憬しすぎるのではないかと疑われるようになったのである。政党は民意代表ではなく、資本家・富豪のための組織であり、少数派の利益だけを擁護するものであると、政党政治を批判する声が強まった⁽⁸⁵⁾。日本国民は策士の政治ではなく、プラトンの『国家』にみられる賢者政治や哲人政治を望んでいると強調された。「哲人政治」という概念が政界に普及し、西欧の民主主義自体が批判されるようになった⁽⁸⁶⁾。

腐敗してしまった西欧文明との接触を断絶し、新しい理想・新しい目標・新しい模範を求めるべきであると唱えられはじめた。西欧崇拜を全く放棄し、日本の独特な価値観に基づいて新文明を創るべきであると唱えられ、物質を崇拝する西欧文明と並びに、道義的な日本文明も存在する権利があるという声が聞こえるようになった。鹿子木は、「功利的文明以外、素町人的文明（近世英国文明）—— 之れをしも尚ほ文明と称し得可くば —— 以外、道義的文明、武士の文明」が存在すべきであると提唱していたのである。日本は「新しく明かなる強き文明の理想」を創造せねばならないと論じられた⁽⁸⁷⁾。英独に英独固有の主義が存在すると同様に、日本にも日本固有の主義があるはずであるという声が強まってきた。徳富蘇峰をはじめとする思想家たちは、日本の国是は「蕩々無辺なる皇室中心主義」にあると信じたのである⁽⁸⁸⁾。日本はアジア諸国の指導者として西欧との闘争を始めるべきであり、西欧主義に対抗すべきであると考えられた。日本人の民族意識が一層強まり、日本のナショナリズムやメシアニズムの形成が促進された⁽⁸⁹⁾。この時点までに、日本は西欧の文化遺産を消化して、「他国の思想に助けられる必要の無いほどまでに成長した」のである⁽⁹⁰⁾。

このように当時の日本思想に文明論の影響が様々な人物の著作において表れているが、最も鮮明にそれが登場したのは、当時藻類学者として知られていた遠藤吉三郎の『欧州文明の没落』（富山房、1914年）と後藤新平の『日本膨張論』（通俗大学会、1916年）であった。シュペングラーの力作で唱えられる理論を先取りして発行されたこれらの著作は同時代の日本社会の思想心理的な雰囲気象徴的に代表していると言える。ほぼ無名の遠藤の著作にも、政治に積極的に参加し日本史に大きな跡を残している後藤の著作にも、ドイツの古典哲学の影響が明確に読み取られ、生物主義・使命主義・反近代主義という要素を発見できる。シュペングラーと同様に、彼らは一体の人類という組織の存在を否定し、文明をある一定の民族の歴史の終焉として捉えていた。西洋文明に鮮明にみられる近代主義、物質

84 恵美「民族心理と政治文明の趨勢」34頁。

85 上杉慎吉「英国の政党政治を説く日本の哲人政治に及ぶ」『日本評論』第21号、1917年1月1日、17-19頁；小倉恒峰「経済界の現状と寺内内閣の政策」『日本評論』第22号、1917年2月1日、52-53頁。

86 中小路廉「現代の政治と策士」『日本評論』第22号、1917年2月1日、45頁；上杉「英国の政党政治を説く日本の哲人政治に及ぶ」17-19頁。

87 鹿子木『文明と哲学的精神』13、32-33頁。

88 徳富『世界の変局』516-517、519頁；大津淳一郎『世界変局と帝国の外交』日清印刷株式会社、1919年、1頁；茅原崑山「新皇室中心主義」『日本評論』1915年11月11日、8-9頁；後藤新平『日本膨張論』2-3頁参照。

89 島谷亮輔「官僚の日本、民主の米国」（『日本国民性の比較研究』）『日本評論』第18号、1916年10月1日、66-67頁；A.M. Pooley, *Japan at the Cross roads* (London, 1917), pp. 20, 294, 312-313.

90 森口多里「伝統主義と人道主義」『日本評論』第21号、1917年1月1日、169-170頁。

主義、合理主義などはその近い没落の気配として位置付けられ、当時の「文明国」に表面化しつつある出生率の低下などは享楽主義・個人主義に現れる「文明の弊害」あるいは「文明病」として描写された。日本がその「輝かしい未来」のために「文明の弊害」を根絶して、独自の基盤の上で独自の道を歩まなければならないという結論も同じであった。

5. 日露における文明論とその意義 —「第二列諸国」の世界

みてきたように、19世紀後半から20世紀初頭にわたって、文明論はドイツ、ロシア、日本の思想界・政治界に広く普及したのである。こうした文明論的な認識は、ドイツの哲学者と地政学者、ロシアのスラヴ主義者、日本の政治学者の思想という様々な形態で現れている。日露独における文明論の意義を明確にするために、構成要素を抽出してその本質に照明を当て、その理解を深めたい。この構成要素として、生物主義、反近代主義および使命主義の三つが挙げられるであろう。

文明論の普及は19世紀の自然科学・社会科学の発達と不可分な関係にあったことが明らかである。自然科学の著しい進歩は社会科学にも巨大な刺激を与え、それを促進したのである。自然科学者によって発見された法則は次第に社会を対象とする研究分野にも適用されるにいたった。ダーウィンやスペンサーの唱える原則は社会を描写するために使用されるようになった。同時代の思想には、その「生物主義」のシルエットが明白にみられる。社会科学の中核をなす「民族」「人種」「文明」というような概念も生物の一種として認識されるようになったことは当然であった。様々な文明の相互関係の産物として現れる世界は「適者生存」の原理に基づいて再配列されたのである。ダニレフスキー、遠藤、シュペングラーの思想は異なった形態をもって出現したが、社会を生物として捉えるという生物主義や有機論は共通していた⁹¹⁾。生物主義というのは、文明論を植えた土壌であると同時に、その方法論でもあったと言える。もう一つの構成要素は反近代主義とでもいえるものであった。文明論の誕生は進歩主義的で西欧中心主義的なリベラルな文明論への反応でもあった。日露独に形成された文明論の核心には保守主義、伝統主義、前近代主義があったと言える。こうした反近代主義的な思潮はニーチェの著作に明確に現れている。いわば、近代主義こそが文明論を唱える人たちの敵であった。近代化が進めば進むほど、日露独では文明論の影響が強まっていった。更に、日露独に広がってきた文明論には使命主義あるいは天職論という要素が秘められた。文明論は学説ではなく、イデオロギー的な役割を果たしうる思想であった。シュペングラーの『西洋の没落』もダニレフスキーの『ロシアとヨーロッパ』も遠藤の『欧州文明の没落』も、純粹に社会科学的な研究でなかったことは言うまでもない。これらには明確なナショナリズムが現れ、この本質は政治的なものにあった。このナショナリズムと密接に絡み合った使命主義こそがその文明論の真髄であったと言える。このように、生物主義は文明論の手段であり、反近代主義はその内容であり、使命主義はその形態であった。文明論の理解を深めるには、その内容である反近代主義の源泉を説明する必要があると思われる。

91) Галактионов А.А. Органическая теория как методология социологической концепции Н.Я. Данилевского // Данилевский. Россия и Европа. С. V-XX 参照。

世界史を辿ってみると、近代化⁽⁹²⁾というプロセスの進展は国によって一様ではなかったことが明らかとなる。近代化の面において、トップを走ったのは18世紀末期に産業革命がはじまったイギリスであった。イギリスにやや遅れて近代化に乗り出したのはフランスとアメリカであった。この諸国における近代化は内発的な現象として生まれたと考えられる。19世紀前半において、イギリスは近代的な世界大国に変容し、全世界に散らばる植民地を誇る大英帝国を築き上げた。近代化を内発的に成し遂げた諸国において、近代主義と不可分な関係にある自由主義思想が誕生した。イギリスの外交政策の中心となった自由主義は、自由競争を世界政治の主流とした。その自由主義は明らかにイギリスの国益を保護するイデオロギーとして機能した。しかしながら、近代化されていない諸国からみれば、それは単なる「社会ダーウィニズム」であった。近代化された諸国の自由主義には、近代化が遅れた保守主義・ナショナリズムが対置された。19世紀には植民地獲得を追求する列強間の競争が顕在化するなかで、ドイツ・日本・ロシアは積極的に国家レベルで近代化を促進せざるを得なかった。1860-1870年代は、ドイツ・イタリアという新しい国民国家の形成および日本やロシアでの根本的な改革で特徴付けられた。イギリス・フランス・アメリカと異なり、これら諸国における近代化は外発的な刺激を受けて始まった。

近代化のプロセスからみれば、英仏米を「第一列諸国」(страны первого эшелона)、日露独を「第二列諸国」(страны второго эшелона)として定義することが適切であると考えられる。「第二列諸国」は近代国家として遅れてスタートしたので、この近代化は人為的に促進された過程でなければならなかった。工業発展が「第一列諸国」と「第二列諸国」の乖離を深刻化させ、「適者生存」の原則がこうした国際政治の歪んだ現状維持を定着させる状況下において、「第二列諸国」は世界舞台の立役者として生き残るために、「促成近代化」(форсированная модернизация)⁽⁹³⁾の道を辿らざるを得なかったからである。「促成近代化」の実現がナショナルな資材・人材の動因を必要としたことは言うまでもない。国民の総動員が必要とされるなか、イデオロギー的な基盤も不可欠な要素の一つであったのである⁽⁹⁴⁾。

外圧で近代化を前近代的な基盤の上で促成しなければならなかった日露独は前提的に反近代主義的な国家であった。近代主義は西欧、特にイギリス・フランス・アメリカを起点として出発したものであったから、この反近代主義は反西欧主義という傾向にもつながっていた。それは「第一列諸国」に対する「第二列諸国」の防御的反応であった。文明論という思想もこういった防御的反応の一種であったと考えられる。それは反自由主義的な形をとって発展し、日露独の国民に、その「固有の生粹なる文明こそ、次の時代に於て世界を支配す可き文明であるといふ信念」⁽⁹⁵⁾を与え、ネーションの総動員に当たり重要なイデオロギー的な役割を果たしたのである。

92 「近代化」という概念は多様性に富むもので、その用語は様々な意味合いで使われるが、ここでは、「近代化」を知識の蓄積および技術の発展に基づく社会の普遍的な変容過程として捉えている。

93 帝国主義的な矛盾が深刻化していくなかで、工業的・軍事的・科学的な面において、先進国との乖離をなるべく速めに埋めるために、「第二列諸国」で行われる近代化の形式の一つ。狭義での「促成近代化」は1920-1930年代のソ連に行われたスターリンの政策を指している。

94 著者の近代化論に関しては、前掲の拙稿「国際政治の力学」154-157頁参照。

95 八杉「露西亞国民性と其文明」23頁。

いわば、「第二列諸国」の類似性は、まず、「国際分業」に起因するものであった。つまり、西欧からみれば、「国際分業」では同様な地位を占める日露独は「周辺諸国」、「後発諸国」、「非西欧諸国」、政治的な意味での「東洋」であった。他方では、「第二列諸国」の類似性は日露独の社会経済的な構造のそれにも現れていたと考えられる。この機軸を構成したのは深刻に定着された封建的・伝統主義的な要素であろう。「士農工商」という身分制構造に根づいた価値観・社会意識・メンタリティーにはこういった類似性の基盤が潜められていたと考えられる。ただし、ここで注意しなくてはならないのは、この類似性が絶対値ではなく、これらを「第一列諸国」と比較するときに明白に現れる相対値であった。

世界政治や社会構造における「第二列諸国」としての類似性は、日露独間において複雑な相互作用的な動きを潜在的に支えたのである。日露独にとって、「第一列諸国」よりも同じ「第二列国家」の経験の方が有益かつ重大であったと考えられる。ただし、同じ「第二列国家」とはいえ、これらの間には明確な差異がみられたのである。こうした「第二列諸国」間関係において、指導的な役割を果たしたのはドイツであったと言える。「促成近代化」という運動のトップに立ったドイツは長期的に日露両国にとっても模範のような存在であった。文明論を含むドイツの古典哲学は日露両国の近代化のために必要な基盤を提供したと考えられる。それゆえ、20世紀初期の日露関係を論じるときも、ドイツというファクターを無視することはできない。むしろ、多くの場合において、日露関係は日独関係の変数でしかなかったと言っても過言ではあるまい。日露関係を考えるとき、この関連性を念頭に置かなくてはならないと思われる。

日露両国は、近代化という共通課題をもって、同様な問題を抱えていたわけである。明治維新を行った日本人の多くは、ピョートル大帝の「熱烈なファン」であり、その改革を高く評価したことはそのためであろう⁹⁶。日本の政治家が、明治維新に当たって、ピョートル大帝の改革を見本としたことはよく知られる事実である。暦の改革や断髪などをはじめとして、18世紀初期のロシアの改革と明治維新の間には共通点が多かった。日露が近代化という同じ目標を目指したことは相互理解のための基盤ともなった。それ故、20世紀初期において、ロシアのインテリゲンツィアが唱える理想が日本の公衆に大きな反響を呼び起こしたのである。日本におけるロシア文学の人気の秘密もそこにあったであろう。日本の知識人はロシアのインテリゲンツィアの抱えた懊悩を自分のものとして認識し、相次いでやってくる西欧化の波のなかでロシア人としてのアイデンティティを確立しようとするロシア文学の主人公のなかにおのれの姿を発見したのである⁹⁷。

日露両国が「第二列諸国」として「促成近代化」の道を歩まざるを得なかったことは、「日本人とロシア人は似ている」という意識を形成したと考えられる。評論家アールドフは1916年に出版された『日本人は我々の友』（«Японцы — наши друзья»）という小冊子のなかで、第一次大戦期における日露接近とそれに伴ったロシア人に対する日本人の好感情の高揚を法則的な現象として形容した。「結局、日本の女性は、無愛想で世故にたけたアメリカ人の女性ではなく、信心深いイギリス人の女性ではなく、軽率なフランス人の女性ではなく、盲目的なイタリア人の女性ではなく、精神的に親しいロシア人の女性こそ

96 メーチニコフ『亡命ロシア人が見た明治維新』講談社学術文庫、1982年、25頁。

97 沢田和彦「新潟とロシア：1900-1944年」『ロシア文化と近代日本』世界思想社、1998年、191頁。

に対して、好感が燃え上がるようになるべきであった」⁽⁹⁸⁾。

6. 「第二列国家」同士の接近

第一次世界大戦期に、文明論がほぼ同時に日露独に登場したことは偶然ではなかった。西欧の危機、大英帝国の危機は日露独に世界舞台に登場する機会を与え、その使命主義あるいは天職論的な意識を解放したのである。いわば、西欧の危機は日露独において文明論に媒介され、激化された。つまり、文明論は単なる空想論ではなく、国際体制の深層に動きはじめる潮流を反映するものであった。文明論の形において、「第二列諸国」の社会意識は、この「第二列諸国」にとって極めて重大であった世界体制の変容をつかむことができたと考えられる。言うまでもなく、世界体制の編成はまず大英帝国を中心とする Pax Britanica の劣化に現れたのである。文明論の台頭は国際システムを結束させる要素、すなわち大英帝国の弱体化を反映したと思われる。つまり、世界大戦になると、世界秩序の基盤をなしている「第一列諸国」と「第二列諸国」との「上下関係」はその脆弱さを暴露した。「第二列諸国」からすれば、この劣化過程は豊富な可能性を含蓄していたに相違ない。具体的に言えば、この可能性は国際体制における地位の向上に潜められたのである。「下克上」の状況下において、「第二列諸国」は絶好の機会を捕まえ、覇権のための闘争に思いきり突入し、その地位を高める可能性を得た。国際体制の弱体化は Pax Britanica の骨格をなすイギリスとの強い依存関係にある日本を強く刺激した⁽⁹⁹⁾。

世界大戦期において、日本は自主的な外交への動きを示した。東アジアにおける勢力の真空を埋めようとする形で積極的に参戦した日本は自主的政策を探りはじめた。イギリスがこうした勢力均衡の変動を承認しようとしなかったことは言うまでもない。1914年、アングロ・サクソン諸国の新聞雑誌において、対日脅威論が盛り上がってきた。イギリス、アメリカ、オーストラリアなどにおける黄禍論の台頭は日本の政治家に日本の脆弱性を痛感させ、日本の政界には戦後の日本がアングロ・サクソン世界に直面せざるを得ないという脅威感が広がってきた。つまり、日本は戦後の孤立という問題に迫られたのである。『中央公論』の評論家はこういった脅威感を次のような言葉で表した。「日本の運命は、到底、危険なる孤立である。如何に負け惜しむも、畢竟、白人主義の犠牲である。如何に米国の御手にお縋り申しても、其の差別的待遇の撤廃は、全く不可能である。如何に久しく英国の為に忠実なる番犬の役を務めても、日本人は、大英帝国に於て有るかなきかのアルメニア国の、世界文明に何物を寄与せざるアルメニア人と同様の立脚地さへ、之を得るの望は全く経たざるを得ない」⁽¹⁰⁰⁾。人種問題の悪化は「イギリスに利用される」という屈辱感を刺激し、自主的な政策の探求を一層促進化させた。日本は「亜細亜に於ける英国外交の玄関番」という役割を演じて満足できず、「英国の番犬」という恥ずべき地位から、「東洋の盟主」という地位を目指し進みはじめた。「屈從的日本が自主的日本に推移せんとする象徴」

98 Ардов. Японцы — наши друзья. Пр., 1916. С. 7-9.

99 日露接近への国際体制の影響について、詳しくは以下の拙稿を参照。Eduard Baryshev, "Russo-Japanese Rapprochement during the First World War: World System Factors," *Social and Cultural Studies* 17 (2005), pp. 93-100.

100 若宮「大亜細亜主義とは何ぞや」14頁。

が現れてきた⁽¹⁰¹⁾。

日本の自主的な政策の確立、つまり世界政治における日本の自立は日英同盟の如何にかかっていることが明らかであった。1915-1916年、日本において日英同盟は厳しい批判を浴びるようになった。犬猿の仲となった日英関係を改造する必要性が痛感され、日本は世界外交の自主的なアクターになるために、外交方針を再構築しなければならないとの声が広がっていった。日本が以前から中軸としていた日英同盟のみに外交政策を任せてはいけないという考え方が強まり、日英同盟はすでにその役割を果たしてしまったと言われはじめた。ロシアの南下拡張を抑制するために締結された日英同盟の必要は全く喪失したと考えられ、日露関係は日露協約によって調整されているため、イギリスの仲介が必要ないと主張されはじめた。日英同盟を「へん明」として位置付ける評論家も現れてきた。日英同盟は「日本偏重英国偏軽」の「片務同盟」として批判を浴びるようになった⁽¹⁰²⁾。

世界政治における日本の地位を高めるために、日本は同じ「第二列諸国」と接近する選択肢しかなかった。理論的に言えば、中国、ロシア、ドイツは可能同盟国であったが、現実的に戦争中において敵対国のドイツや反日的な態度をとった中国と直接に接近するのはほとんど不可能であった。それゆえに、協商国でありながら、「第二列諸国」であるロシアとの提携は、いわば、世界強国を目指す日本にとって唯一のシナリオであった。日本が日露接近を協商国の連帯を強化するための対策として呈示すれば、イギリスは日露接近を邪魔するどころか、それを祝福するしかなかったからである。

日露接近の方針は明らかに日英同盟を弱体化し、極東における日本の自主的な政策を支持していた。1916年7月3日に締結された第四回日露協約は、日本がイギリスに対する依存を弱め、ロシアとの関係の正常化することによってより自主的な外交方針を確立するという方向へ動きをはじめたことを意味した。政治家の大岡育造（1856-1928）は1916年の日露協約を日英同盟と比較して、「日英同盟は恰も古武士と大商人との結婚」のような連携であるが、「日露親善は士族と大地主との親類交際の如し」であると強調し、露国との防守同盟の協約を締結することによって、日本は日英同盟における利害関係よりもその武士道精神を発揮できたと指摘した⁽¹⁰³⁾。つまり、日露同盟を成立させることによって、日本は「自主的外交の方針を確立し東洋に於ける其の優越せる立場より自主的外交の本領を発揮した」⁽¹⁰⁴⁾。日露同盟の意義は「独逸の復讐に備ふるが主眼ではなく、又日露再戦の危険を除去するが目的でもなく、更に英仏露の重圧に屈服し迎合せんが為でもなく、日本が東洋、南洋に平和的飛躍を試み、広く太平洋上に日本の文明的使命を完成せんが為であ

101 若宮「大亜細亜主義とは何ぞや」11-12頁；北吟吉「亜細亜主義の真諦を論ず」『新小説』1917年4月、41、49頁。

102 当時の日英同盟に対する非難の広がり把握するためには、以下の文献をみればよい。F. Coleman, *The Far East Unveiled: An Inner History of Events in Japan and China in the Year 1916* (London-New York: Cassel, 1918), pp. 17-22; J.W. Robertson Scott, *Japan, Great Britain and the World: A Letter to My Japanese Friends* (Tokyo, 1916), pp. 1-2, 11-14; 植原悦二郎「日本今後の植民政策と人種問題」『新小説』1917年1月、39頁；頭山満「日英同盟はへん明だ」（『日露新協約論』）『洪水以後』第11号、1916年4月、8頁；煙山専太郎「日露独三国同盟論」『雄弁』1917年新年光彩号、48頁；戸水寛人「日英露の纏綿錯綜を如何」（『日露新協約論』）『洪水以後』第11号、1916年4月、6頁；秋山雅之介「日本の国際的地位」『日露実業新報』1916年8月、35頁。

103 大岡育造「諸元老の仕事」『日露実業新報』1916年8月、27頁。

104 小川平吉「東洋平和は我が自主的外交にあり」『日露実業新報』1916年8月、19頁。

る」⁽¹⁰⁵⁾とみなされた。

要するに、日本はロシアとの接近を通じて、イギリスからの依存を弱め、新しい国際的地位を獲得できたわけである。日露同盟は輝かしい日本文明の建設に貢献するものとして認識された。この意味において、日露接近は、危機に直面している「第一列諸国」に対抗する「第二列諸国」の提携であり、世界政治における現状の変化を求める積極的な政策であった。

更に、日露接近には異なる面もあった。日本からすれば、日露同盟は「第二列諸国」との提携としての独自の価値が存在したのみならず、日露独同盟という「第二列諸国同盟」に変身する可能性を秘めていた。英露協商はある限られた条件付きの利害関係の一致として認識された。歴史的・社会的・経済的・政治的にみても、ロシアとドイツとは「相結ぶべき因縁を有して居る」⁽¹⁰⁶⁾ので、戦後必ず再び接近するであろうとみなされた。こうした論調は法学者の寺尾亨（1859-1925）の言葉に明確に表れている。「世界政局の将来を考へると英露の親善は決して永くはなからう、独逸と云ふ共同の敵あればこそ聯合を維持して居るが、一旦平和の時が来ると種々の点に於て英露の利害は衝突する、實際露国のために英は終世の敵と見る方が間違ひない」⁽¹⁰⁷⁾。それを考えると、ロシアとの接近は潜在的にドイツとの接近を孕むべきもので、日独露同盟の先駆としてみえたことが分かる。

第四回日露協約の締結の背景には、ドイツと単独講和を結ぼうとするロシアの対策が読み取れるのではないかと考えられたどころか、それでなければ、日露同盟には何らかの意義が認められないと強調する論者がいた。茅原崋山は日露協約の裏側に日露独同盟の影を見抜き、その根柢について次のように論じた。「日露協約は露国に於て予じめ独逸と諒解する所あり、露独が単独講和をする前提として、日露独三国同盟を実現する前提として締結されたものであらうか、それならば頗る先見のある外交手段と見ねばならぬ、日露独三国が左提右携して大英帝国を処分すといふ面白い劇が仕組まるる訳ではあるが、それには露西亜は先づ独逸より波斯、印度に自由手腕を揮ふも独逸は決して露西亜に対抗する協約を締結せずといふ言質を取って置かねばならぬ、露西亜は果して斯かる言質をば独逸より取り得たであらうか、それは我々が既に述べておいた理由からして容易に信ぜられない、容易に信ぜられないとすれば日露協約は余りに意味の深いものとは受取れない」⁽¹⁰⁸⁾。茅原によれば、日露同盟は「米国が日本の敵だ」と宣言し、「英国が露西亜の敵だ」と宣言したものであるから、米、英、独を少なくとも一時的に合同させたのである。それゆえ、日露両国は戦後の孤立を避けるためには日露同盟にドイツを加盟させることによって、それを拡張しなくては行けない。その意味において、第四回日露協約の締結は新しい国際政局、世界大戦から胚胎すべき新しい国際関係を打開する先容のようにみえた。日露同盟は日露独同盟の形でその完成をみるであろうとみなされ、日露協約は戦後の協約であるので、日本とロシアとは互いにドイツと提携しないことを約束する必要がないと論じられた。言い

105 東臺散史「新聞言論の頽廃」『日本評論』第17号、1916年9月1日、26-27頁。

106 長島隆二「露独必ず提携せん」『日本及日本人』1916年1月号（第671号）、451頁。

107 寺尾亮「英国は終世の敵」（「日露新協約論」）『洪水以後』第11号、1916年4月、9頁；この他に、末広重雄「同盟締結の要なし」（「日露同盟可否論」）『中央公論』1915年10月1日、66頁；茅原崋山「移民問題と日米戦争」『日本評論』第22号、1917年2月1日、115頁などを参照。

108 茅原崋山「日露協約と国際政局の変化」『日本評論』第16号、1916年8月1日、7頁。

換えれば、当時の日本において、日露独同盟を視野に入れぬ日露同盟が無意味であるという立場は明確に表面化してきた⁽¹⁰⁹⁾。

いわば、日露同盟も日露独同盟も、国際体制の中核にあるアングロ・サクソン系勢力を仮想敵とする同様な性格をもつ提携であった。日露独三国ともイギリスを中心とする国際秩序に不満を隠せない国家であったので、日露独同盟の仮想敵の一つとしてイギリスが認識されたことは当然であった。日露独同盟の締結によって、イギリスは「詮方なき応報」として孤立してしまうであろうと予想された⁽¹¹⁰⁾。ただし、日本からすれば、主要な仮想敵は衰えつつあるイギリスよりも、その代わりに次第に登場しつつある米国であった。日本はロシアとの接近を通じて、英米諸国との勢力不均衡を修正し、人種戦争のリスクを削減しようとした。人種戦争が勃発した場合、「露西亜ほど関係の深い国はない」と言われ⁽¹¹¹⁾、日露同盟が非常な効果を示すであろうとみなされた。「将来不幸にして日米戦争の勃発を見ることがあるとすれば英国は決して日本の味方ではないのは知れて居る、日露同盟は此時に於て多大の効果を発揮するのである」⁽¹¹²⁾。日米関係が悪化しつつあった当時、予想される戦争に備えて、ロシアとの同盟を結ぶべきであるとは、元老をはじめとする日本の政治家たちの考えであった。

日露同盟が成立して以来、日露独同盟は日本外交の選択肢の一つとして認識された。こうした同盟は実際に締結されるまでにいたらなかったが、第二次世界大戦が終わるまで、日露独間に相当密接な関係が存在していたことは事実である。日露独の政治家は日露独同盟の提案を通常念頭に置いていたと考えられる。三国を結びつけるファクターとして、反英米主義というものが働いていたと考えられる。こうした反英米主義は「第一列諸国」に対する「第二列諸国」の態度であったと言える。自由競争に基づく、「第一列諸国」によって作られた国際秩序は「第一列諸国」にとっても脅威を潜めていたのである。「第二列諸国」の日露独は世界の主導権を目指して「不公平な」現状維持を破壊しようとしたのである。第一次世界大戦期に顕著化した日露接近が形式的に協商国間関係の強化とみなされていたが、「英米両国人に多大の喫驚」を与えたのはこのためであろう⁽¹¹³⁾。

7. 日露接近と文明論

世界大戦が顕在化させた「西洋の没落」の時代において、世界においてロシアの役割は注目されるようになった。茅原は、1915年6月の記事において、その問題を明確に設定した。「露西亜の将来は竟に如何。これは実に露西亜の問題なり、欧州の問題なり、世界の問題なり、而して日本の問題なり」⁽¹¹⁴⁾。英米勢力への平衡錘としてロシアを認識する後

109 茅原崋山「日露協約と国際政局の変化」4-8頁；茅原崋山「日露独三国同盟：欧州大戦後の日露独同盟論」『日本評論』第22号、1917年2月1日、113-114頁；更に、日露独同盟に関しては、煙山「日露独三国同盟論」を参照。

110 北「亜細亜主義の真諦を論ず」54頁；吉野「協商は可、同盟は不要」75-76頁参照。

111 前田正名「日露観」『日露実業新報』1916年4月、13頁。

112 菅原傳「結局は対支問題」(『日露新協約論』)『洪水以後』第11号、1916年4月、8頁。

113 寺尾「英国は終世の敵」9頁。

114 茅原崋山「露国及び露国民」『第三帝国』1915年6月25日、4頁。

藤にとっても、世界戦争後のロシアの勃興は「世界の大問題」⁽¹¹⁵⁾であった。同時代の日本人の対露観には大きな転換あるいは関心の高揚がみられた。将来、ロシアは日本の運命にも大きな影響を与えるであろうと思われ、ロシアの行方は議論の的となった。

すでに述べたように、世界戦争は「文明国」の欠陥を顕在化させた。総力戦の状況下において、個人主義を本位とするイギリスなどが、国民の全力を動員できず、その体制の弱さを露呈した。他方、世界戦争は「野蛮国」とみなされた国の強さが顕在化した時期となった。イギリスと異なり、ロシアは、むしろ、国民的な集中力をみせた。世界戦争は、ロシア社会におけるナショナリズムの高揚や精神的な統一を示した。階級的・宗教的・民族的な矛盾で分裂されたロシアが災禍を目前にして国民を動員できることは思いがけないことであり、興味深いことであった。徳富蘇峰によれば、世界戦争は、日露戦争で敗れたロシアが回復したのみでなく、強くなったことを証明したのである⁽¹¹⁶⁾。

文明論の視点から世界を観察する遠藤によれば、享楽主義・個人主義・無信仰などという西欧文明の頹廢の気配はロシアにはみられなかった。この意味において、ロシアは西洋の正反対であった。ロシアの上流社会の中にさえ愛国主義・スラヴ主義が沸いていた。遠藤は、ロシアの上流社会の中には、西欧の文明にカブレて、その弊害を受けている人が少なくないにもかかわらず、下層社会には「太古以来のスラヴ魂」や「頑固な宗教心」が厳然として残っていると主張し、「西欧人が常に野蛮野蛮と嗤笑する露西亜の兵が最も勇敢」であると指摘した。「露西亜は後悔してスラヴに戻らうとする、欧化の墮落から足を浄めて、堅実なる自然に還らうとする」。総力戦に直面したロシアが独自の源泉に戻ろうとしたことは、「ロシアがまだ墮落していない」ことを裏付けていた。民族的な根源こそにロシア独自の勢力・気力の秘密があると考えられた。ロシアの下層社会にみられる頑固な宗教心と伝統的な価値観は社会構造を保護する要素として挙げられ、信仰から生まれる「崇敬服従」は文明の弊害の一つである個人主義の台頭を防ぐと唱えられた。伝統的な価値観や伝統的な社会構造においてこそ、ロシアの強味があるとみなされたのである。「享楽主義の深度に逆比例を示す、即ち欧州文明の弊害の尺度となる」出生率の数字からみても、ロシアはいまだ「若いロシア文明」であった。高い出生率、頑固な宗教心、「スラヴ魂」の結合はこの若さの証拠として解釈されていた。「西欧羅巴の「文明」の弱点は、今日の露西亜全般は未だ持て居らぬ」と論じられ、「野蛮国」ロシアは「西欧羅巴と全く違ふ」と指摘された⁽¹¹⁷⁾。

20世紀初期までに、ロシアの芸術・社会思想・科学が世界に紹介され、ドストエフスキー、トルストイなどの文豪の名前が世界的に有名になったことも、ロシア文明の元気な成長ぶりを示していた。高い出生率を背景として産業化・都市化の進むロシアは世界の注目の的であった。当時在ペトログラード日本大使館に外交官補として勤めていた芦田均(1887-1959)が指摘するように、「その頃のロシアは、トルストイの国、ヴォルガにはぐくまれた国として、若い人達の憧れの世界であった」⁽¹¹⁸⁾。戦後の世界は如何なるものになるかと議論されるなか、同時代の日本人の意見はロシアの未来への評価に対してほぼ一致

115 後藤新平『日本膨張論』199頁。

116 徳富『世界の変局』484頁。

117 遠藤『欧州文明の没落』88-89、44-49、97、116-119頁。

118 芦田『革命前夜のロシア』1頁。

していたと言える。1920年代、内戦で苛まれたロシアで行方不明となったジャーナリスト大庭柯公（1872-1924？）は1916年に次のように述べていた。「現下の欧州戦乱に際し列強は何れも至大の関係を有つてをるが軀て其れが結了した将来、最も急速な経済的回復を成すのは何国であらうか、或は曰ふ独逸とか英吉利とか、併し私は露西亞の広大なる領土と多数の人口に徴して此点に於て最も露国に矚目するものである」⁽¹¹⁹⁾。

衰退への道を辿りはじめた西欧文明は、戦後、新しい文明に席を譲るべきであると思われた。その文明は西洋と東洋を融合させるものとしてロシアから誕生するであろうとみなされた。政治学者で『太陽』主幹の浮田和民（1859-1946）はラテン民族、チュートン民族、アングロ・サクソン民族の代わりに、「今後世界の大舞台に於いて活躍すべき立役者たる運命を有して居る」のは、「実にピーターやトルストイを出した」スラヴ民族であると強調した⁽¹²⁰⁾。昇曙夢は、戦後の国際情勢を予想できないと指摘しながら、ロシアは「大に発展すべき国家である事だけは何人も断言し得る」と述べた。「一般文明から論ずれば甚だ幼稚で而も発達せぬ国家であるが、それだけは今後文明を生む余裕を有してをる。国民の脳力が未熟の状態で未だ爛熟してをらぬ故に反て将来には発達成熟して行く予想を存してをる」⁽¹²¹⁾。遠藤にとっても、「将来全欧羅巴の覇者たるべきものは露西亞である」ということは疑いのない事実であった。彼は、ロシアは「欧州全土に号令する」ものとなるとみなしたのである⁽¹²²⁾。

世界政治が弱肉強食の原則を中心として展開するかぎり、軍勢力というファクターは国家の未来を評価するために不可欠なものとして注目された。比較的に大きな人口、高い出生率、精神的な強さは強い軍隊を形成するための必須な前提であるとみなされた。ロシアはこの要素を備える国であった。明治・大正時代の新聞人として日本史に名を残している阿部宇之八（1861-1924）はこの意味でのロシアの勢力を認め、以下のように論じた。「陸軍国たる要件の一つは、国民の体力と人口の多数とに由らざるを得ぬ、此の点に於いて、露国は最も其の要件に満足するものである。若し将来同国内に化学工芸の進歩する時もあるば、世界第一の陸軍国たるは疑ひなきことである」⁽¹²³⁾。軍事的な面でのロシアの強さというファクターは日本人の目に重大な利点として映っていたに相違ない。

同時代の文献を検討すると、日露の国民性の類似性に関する数多くの言及を見逃せない。全く異なる世界観・人生観・政治観をもつ人たちは、日露両国間には共通点が多いことを指摘した。ナショナリストの内田良平（1874-1937）、宗教的思想家内村鑑三（1861-1930）、立憲国民党党首の犬養毅（1855-1932）はその代表であった。日露戦前に『ロシア亡国論』を提唱した内田は、第一次世界大戦になると、その態度を変え、日露の国民性の類似を強調し、日露接近を唱えるようになった。「世界の人種中我が日本民族即ち日本人と性質上最も多き相似点を有する人種はスラヴ人即ち露西亞人である、朴訥率直なる性質は我が日本民族史に現はるる民族性に最もよく似通ふて居る、又彼の深切振りに就いて云ふも他の

119 大庭柯公「西伯利と邦人の発展」『日露実業新報』1916年7月、17頁。

120 「日露同盟に対する名士の意見」『日露実業新報』第1巻1号、1915年2月、37頁。

121 昇曙夢「露西亞文明の将来」『新理想主義』1916年1月5日号、29頁。

122 遠藤『欧州文明の没落』97、54-55頁；更に、吉江孤雁「露西亞国民性の一面：国土を愛する情」『外交』第1巻第5号、1915年3月1日、63-64頁参照。

123 阿部宇之八「極東に於ける将来の平和と日露倶楽部の使命」『日露実業新報』第1巻第1号、1915年2月、19頁。

欧州人の如く華やかならず至つて無技巧である」⁽¹²⁴⁾。犬養も日露接近論を支持し、ロシアは「半ば亜細亜的風俗習慣を有する国柄であり、且又純亜細亜人種を包容し居るが故に、日本人との結合は、最も都合よく、最も円滑に成立ち得べき、可能性を持つものと思はるのである」と主張した⁽¹²⁵⁾。内村も、「亜細亜人同士」としての日露両国が提携すべきであると考えていた。「露人は其半身を亜細亜に有して善く亜細亜を解す、日本人は亜細亜に生れて、其長子たり、二者は性来の協力者ならずや」⁽¹²⁶⁾。「若い新しい国」同士である日露の政治体制や国体にも共通点が存在するとも指摘された。ロシアとの経済的な関係を進展させようとする前田正名(1850-1921)は「世界中に於て純然たる帝国は、実に我が日本と露西亜とあるのみである」と指摘し、同盟国として「共和民主の国柄よりも」「国民尊宗の中心たる皇室の存在する立憲君主の国柄の方」が最も適切であると提唱した⁽¹²⁷⁾。大庭柯公からみれば、日本の武士道とロシアの貴族階級に定着した道徳律には、似通った点が少なくなかった⁽¹²⁸⁾。

日露の類似性は両国とも「若い民族」であるという事実で説明された。その立場は昇曙夢の著作に明確に現れている。「露国と日本とは文明史上の關係に於て、まだ若い新しい国である。即ち露国はピョートル大帝の改革と共に文明の途に上り、我日本は幕末の開国と共に進取の道程に就いた(中略)露国と日本とは社会的乃至国家的發達の程度が殆んど同じ水平線に立つて居る。我々が露西亜の文学、露西亜の文化、露西亜の人間に接して、そこに言ひ知れぬ共鳴を感じ、親善的關係を意識するのも、一つはそれが爲である」⁽¹²⁹⁾。

日露接近も、文明的に新しい、すなわち光榮な将来のある国家同士の提携として歓迎された。昇曙夢はこの接近を次のように評価していた。「日本と露西亜とは文明史的關係に於てまだ新しい国である。此の新しい二大国が互ひに提携したといふことは、将来の世界的文明に取って大なる意義を有する、それは両国共多望の前途を控へて居るからである。(中略)日本民族と露西亜民族とはまだ若々しい、元氣のある、そして将来大に為すあらんとする国民である。文明史上の未成品であるだけに是から大に發展活動しようといふ大なる未來を持って居る」⁽¹³⁰⁾。「ロシア国民の若さ」は、日露間にはより深い・より平等的な關係の成立に貢獻するであろうとみなされた。昇は、日露同盟は本質的に日英同盟と異なっていると強調し、日英同盟は単なる政治的、すなわち形式的な關係を意味する一方、日露同盟は「兩國民の痛切な要求に基いて居る」と述べた⁽¹³¹⁾。

スラヴ民族とゲルマン民族の闘争は世界戦争の中心に位置した。その闘争は、すでに述べたように、ロシアには解放戦争や独立戦争として認識されていた。ロシアはドイツの文明的な支配を脱して、固有の文明を生み出すべき時期に到達したとみなされていた。日本でも、ロシアはドイツ文化のあらゆる痕跡を一挙に根絶して、固有の文化を培い、固有の思想を發展させ、新しい文明国として世界に臨むであろうと考えられた⁽¹³²⁾。

124 内田良平「日露親善の素因」『日露実業新報』1916年7月、15頁。

125 犬養毅「支那保全の確保」『太陽』1915年1月、112頁。

126 『内村鑑三全集』第13巻、314-315頁。

127 前田「日露親」13頁；「日露同盟に対する名士の意見」41頁。

128 大庭柯公「露国及び露人研究」中央公論社、1983年、299-300頁。

129 昇曙夢『露国及露国民』銀座書房1915年、3頁。

130 昇曙夢「日本民族と露西亜民族」(『日本国民性の比較研究』)『日本評論』第18号、1916年10月1日、78頁。

131 昇『露国及露国民』序1-2頁。

132 同上、251-252頁。

「西洋の没落」の時代において、日本人は「スラヴ民族の広大なる心と、高遠なる理想と、偉大なる信念」に敬服せずにはいらなかった。ロシア文明には、未来の日本文明の建設のために欠かせない精神性があるとも考えられた⁽¹³³⁾。スラヴの源泉に戻ろうとするロシアの動きは、「東京の山手のハイカラ連中」に一目瞭然に現れる西欧の悪影響に対する批判を引き起こし、源泉の探求を刺激したのである。つまり、ロシアが——ロシアにとって西欧の権化でさえあった——ドイツとの全面的な戦争に思い切って突入し、国内におけるドイツの影響を根絶しはじめたことは日本人に西欧との関係を反省させる契機となり、自立性への動きを刺激したと思われる。茅原は昇の『露西亞及び露国民』を引き合いにして、「若し露西亞が新なる文明を建設すべき運命を有つてゐるとしたならば、日本も亦別に新なる文明を建設すべき位地に居るのではあるまい乎」と強調した。「日本人は何にも新文明建設を露西亞に譲る必要はない、況してやそれを露西亞に譲つて既に過去の暗黒に葬られつつある西欧州や南欧州を学んで、物質的個人主義、ストライキ、社会主義、サンディカリズム、デモクラシー、無政府主義などを繰返へして居るのは、実に以て不見識千万ではないか」⁽¹³⁴⁾。「西欧の没落」という状況下において、このようにロシアは日本のナショナリズムを刺激したと考えられる。

言い換えれば、「西洋の没落」の時代において、ロシアの文明的な意義が、少なくとも日本において、再評価されたのである。「野蛮国」とみられたロシアは「文明的に新しい若い」ものとして認識されるようになった。独自の文明の建設を望むロシアは、日本人の目に魅力的に映り、日本の固有な文明の動きを刺激した。ロシア文明こそが輝かしい未来があるため、ロシアとの接近は将来性ある事業としてみなされた。日露接近は「若い国民」同士の提携として捉えられるようになった。日露接近は「新しい文明の建設」への動きの始まりであると、昇は強調した。それによって、日本はロシアの「精神的文明の内容を汲んで」日本文明の内容を豊富にすることができると期待されたのである⁽¹³⁵⁾。

「西洋の没落」の状況下において、文明論は日露同盟のために思想的な根拠を作ったと考えられる。「人類が極めて混沌たる過渡期」にあるという意識は、戦後世界の姿をめぐる熱烈な議論を引き起こし、戦後世界の問題を社会生活の最も主要なものの一つとした。同時代の活字メディアは予言・予測・予想・予期づくめであり、同時代人の意識は幻想や瞑想等に満ち溢れていた。将来の世界の発展に関する予想は国内政治・外交にも重大な影響を及ぼしたに相違ない。戦争の結末を予想できないなかで、意思決定に迫られた政治家はその判断を自分の主義・人生観・世界観などに任せるしかなかったのである。戦後世界の相貌に証明を当てる文明論はこうした意思決定に当たって有力な根拠の一つとなったと考えられる。すなわち、文明論は政治家の意思決定を左右する行動指針でもあった。

文明論の影響は「科学的政治家」といわれる後藤新平の思想に明確に現れている。後藤はその政治的・社会的な活動において、文明論の「伝導体」であったと言っても過言ではあるまい。彼こそは自分のなかで茅原崋山、昇曙夢、大庭柯公、徳富蘇峰などの思想を融合し、1916年の日露接近を推進していた人物であったと言える。後藤は日露独同盟論

133 昇『露国及露国民』8頁。

134 茅原「露国及び露国民」4頁。

135 昇「日本民族と露西亞民族」84頁。

を唱え、「超東西思想」や「東西文明の調和同流」を求める茅原と親しい関係にあったが、茅原こそは保守主義的な勢力の台頭で特徴付けられ、寺内超然内閣の成立に現れた 1916 年の転換を思想的に擁立したものであったと言える。寺内正毅に率いられた「非立憲（ビリケン）内閣」に大臣の椅子を占めた後藤新平も仲小路廉も茅原と仲良い関係にあったので、寺内内閣の成立は崑山の所論の具体化であるとも言える。茅原は日露同盟を文明論的な立場から弁護する昇曙夢の友人であり、山縣有朋から好意を受けていた。それゆえ、ロシアを最も魅力的な同盟国としてみる根拠を与える文明論は昇曙夢－茅原崑山－後藤新平－山縣有朋という連鎖で伝達されていた一方、その影響の表現でもあったと考えられる。こういった連鎖のなかでは、後藤の役割が枢要であったろう。政界の絶頂に立つ後藤はその思想を公にすることができたのみでなく、それに基づく構想を外交面で実現させるために全力を尽くした。四回にわたって締結された日露協約は、ほぼ彼の構想を実現したものであった。1916 年の日露接近の背景において、文明論の形で「後藤の世界」の影響が現れていると言える⁽¹³⁶⁾。

結 論

「第二列諸国」である日露独において、シュペングラー、ダニレフスキー、遠藤吉三郎という似通った思想が登場したのは、偶然ではなかった。日露独における文明論の存在は、この諸国が世界体制において同様な地位にあり、同様な問題を抱えていたという「第二列諸国」の類似性の表れであった。「第一列国家」である大英帝国を中心とする Pax Britanica 体制の危機となった第一次世界大戦は、現状維持を破壊しようとする「第二列諸国」の日露独によって、「西欧文明の没落」として受け止められ、西欧からの解放の機会として迎えられたのである。こうした歴史的な転換期の受容は、国民の総動員というイデオロギー的な機能を果たした社会意識の不可分な一部である文明論によって媒介され、激化されたと考えられる。つまり、世界体制が危機に直面したなかで、日露両国は西欧文明の本質的な要素を批判しはじめ、独自の文明建設への動きを促進した。ところで、独自の文明の建設という課題は世界政治における自立した地位の獲得から出発しなくてはならなかった。同じ「第二列国家」と接近しない限り、「第一列諸国」の拘束から解放する道がなかった。同時代の日露接近はこういった論理で動かされたのである。「第二列諸国性」の表れである文明論はこのプロセスに当たり、西欧文明の危機の認識を強化し、民族意識を刺激し、西欧への反感を起させるとともに独自の文明の創造という使命感を抱かせることによって、促進剤の役割を果たしたと考えられる。

他方では、文明論は、予測機能を果たしうる応用理論として機能した。応用理論としての文明論も日露接近に大きな影響を与えたと考えられる。第一次世界大戦は世界体制の危機であったという意味において、政治家を複雑な選択の前に立たせたのである。明白に予測的な価値をもつ文明論は戦後の世界像に照準を当て、政治家の意思決定を左右したと考えられる。文明論は大正初期の社会学者や政治家に、ロシアを最も魅力的な同盟国として

136 論文の容量の制限のため、後藤新平の文明論と日露接近へのその影響に関しては、詳しく別個の論文で論じたい。

みる根拠を与えたと考えられる。イギリス・フランスという旧ヨーロッパが衰退期に入りつつあることが痛感されたなか、世界政治における日本の地位を向上するために、高い出生率・深い宗教心などに現れる若々しいエネルギーのあるロシアとの接近は、日本の政治家たちの目において、有利で適切な対策として映っていた。この魅力は日露独接近への道を切り開くという点にもあった。昇曙夢―茅原崋山―後藤新平―山縣有朋という連鎖は文明論を伝達するものでありながら、その影響の表現でもあったと考えられる。

文明論は同時代の日露接近にとり不可分な要素であったと思われる。文明論を日露接近の背景として捉えることは、我々が日露関係史・世界史・日本史およびロシア史の間に掛け橋を作り、その歴史的な流れの理解を深めることができる。更に、こうした現象に焦点を当てることによって、権力政治論の枠組みを越える説明を見出せる。文明論の検討は日露接近を世界史というマクロシステムに編み込むことに役立つであろう。

Theory of Civilizations as a Background of Russo-Japanese Rapprochement during the First World War

BARYSHEV Eduard

The term “theory of civilizations” is usually associated with the German philosopher Oswald Spengler and the English historian Arnold Toynbee, who — it is believed — worked out an original conceptualization of world history. Oswald Spengler’s *Der Untergang des Abendlandes* (1918) is considered to be the starting point of this theory. Civilizationists maintain the position that there is no such entity as humankind. World history is essentially a product of different interactions between great cultural formations, described as “civilizations,” “cultural super-systems” or merely “cultures,” which might be understood as independent actors in world politics and world history. These formations are characterized by internal integrity and self-sufficiency. Like any biological subject, “civilizations” go through phases of birth, growth, blossoming, decline and death.

It should be noted that the “theory of civilizations” was not a mere scientific conception, born in the minds of some outstanding individuals. It seems to have been an integral part of the social consciousness of some great nations. The contours of the theory of civilizations can be observed in the works of the Russian thinker Nikolai Danilevsky, whose *Rossia i Evropa* (1869) anticipated Spengler’s theory, or Japanese scientist Endo Kichisaburo, whose *Oushuu-bunmei no botsuraku* (*The Decline of European Civilization*, 1914) immediately evokes Spengler’s *The Decline of the West*. The theory of civilizations was deeply rooted in the socio-economic conditions of the development of European countries during the 19th century.

The ideas comprising the core of the theory were the product of a German philosophical heritage. The conceptual roots of the theory might be found in the philosophy of Hegel, who asserted that every nation had its own mission and its greatest task is in the realization of this mission. Metaphorically speaking, the theory was born between biologism and antimodernism, which were highly influential streams of thought in the 19th century. The former was an inalienable part of modernism itself, and the latter was a reaction to it. The theory of civilizations appeared as a result of a combination of these elements with messianism. It was in this particular form that it spread to Germany, Russia and Japan.

The enthusiastic reception of the theory of civilizations in the above-mentioned countries was a result of the similarity of their positions with regard to the international “division of labour.” All these nations could be perceived as “second echelon nations” when compared with Britain, France and the USA, which had begun their movement on the path of modernization and industrialization earlier. As relative late-comers, these nations found themselves in a bitter struggle for survival, and had an urgent need to mobilize their power if they were to maintain their position as independent actors in the arena of international politics. It is generally supposed that “the theory of civilizations,” as a part of the social consciousness at that time, played an important role in this process of mobilization. Whereas Britain, France and the USA were already highly industrialized, and therefore their interests lay in maintaining the “status-quo,” Japan and Russia, being “second echelon nations,” were waiting for a chance to replace them and the civilizations theory legitimized their ambitions.

The First World War was met and greeted in Japan and Russia as the beginning of the “Decline of the West.” To the Japanese and the Russians the Great War was perceived as revealing the problems and defects of Western civilization. It signified not merely a

crisis in relations between the Great Powers, but was perceived as being a by-product of the international system itself and its fundamental principles of liberalism, which elevated “social Darwinism” and imperialism to prominence as concepts in the practice of international relations. Against the background of German military success, the renunciation of *laissez-faire* and the introduction of the conscription system by England were considered as symptoms of the decline of the British Empire. The First World War was heralded in Japan and Russia as a transitional period, which would eventually result in the collapse of the entire world system.

The crisis of the international order had a huge influence on the position of Japan in the world system. The First World War afforded Japan an opportunity to execute its special “civilizational mission,” starting with an attempt to establish its foreign policy on a more independent basis. This resulted in discussions about revision of the Anglo-Japanese alliance, which for a long time had been an axis of Japanese diplomacy. The World War revealed a serious contradiction between the position of Japan as an independent actor and her strong orientation to Great Britain in the international arena. The crisis of the West, with the British Empire as its core element, pushed Japan into the arms of Russia. *Rapprochement* with Russia as a “second echelon nation” meant for Japan an opportunity to weaken her dependence on Great Britain, the classic example of a “first echelon nation.” In other words, *rapprochement* with Russia could be an instrument for securing Japan an independent position in world politics. The civilizations theory, which mediated “the decline of the West” in the “second echelon nations,” strengthened consciousness of the crisis and invigorated Japanese nationalism and messianism. The latter, in its turn, led to the grasp for national independence and pushed Japan to closer relations with Russia.

On the other hand, the theory of civilizations, including clear predictive features, presented a guide to action for Japanese politicians, who needed some vision of the postwar future with which to play the big diplomatic game during the World War. First of all, the theory of civilizations demonstrated that Britain and France were moving into an abyss. Secondly, according to this theory, America, Japan’s main rival in East Asia and the Pacific, was considered as an extension of the West, embodying all the “diseases” of European civilization, which was facing decline. On the contrary, Germany and Russia were described by the theory as the “young nations” that would have a splendid future.

Germany was considered to be an attractive ally, because of her rapid growth and vigorous conduct on the world stage: that is why, from the strategic point of view, *rapprochement* with Germany seemed to be a more effective and reasonable tactic, but in the conditions of war it was extremely difficult. In this situation Russo-Japanese *rapprochement* seemed the only possible variant. In the conditions of “the decline of the West,” the dynamic economic and demographic development of Russia together with elements of traditional structure, not yet corrupted by modernism, such as monarchy, deep religiousness etc., testified that Russia was a “young nation” which had a long and glorious future ahead of it. Moreover, Russo-Japanese *rapprochement* was considered to be a reasonable combination, because it could open a way to a Triple Japanese-Russo-German Eurasian alliance in the case of conclusion of a separate peace treaty between Russia and Germany, securing Japan from isolation in the postwar world.

Without doubt, such considerations played a fundamental theoretical role, advocating the necessity of Russo-Japanese *rapprochement*, and had a major influence on the course of Russo-Japanese negotiations, which led to the Russo-Japanese Alliance of July 3, 1916. Such civilizational arguments for Russo-Japanese *rapprochement* appeared vividly in the position of Baron Goto Shimpei (1857-1929), an influential political leader of the beginning of the 20th century.

Focusing on the theory of civilizations as the background of Russo-Japanese rapprochement not only helps us to reconstruct a three-dimensional view of Russo-Japanese relations during the First World War, but also deepens our understanding of a crucial period of world history and the mechanisms of world politics.